

595-83



1200501527248

595
83



9.7.11

人語人生
子德生人

著述以文



序

我國の現状が、思想的に未曾有の危機に直面しつつあることは、何人もこれを疑ふことを得ない。かゝる現状を招來した原因は、世界思想界の一般的趨勢もその一つであり、我國經濟界の不況より來る生活難もその一つであり、我國教育界の根本的なる方針錯誤もその一つであらうが、更に一つの有力なる原因として、我國民が研究思索反省の美德を喪失してある事を挙げねばならぬと思ふ。

國家を危殆に導く危険思想の如き、殆ど泰西のそれを直譯したものに過ぎず、一夜漬のパンフレット、コンミニストが跳梁してゐる有様である。かゝる時弊を矯正するには、國民全體が古今東西の賢哲文豪の思想を玩味考究するに努め、よく沈潜靜視して思索反省に力を惜まざるにあると思ふ。

著者は人心の和平と世態の靜安とを衷心より希願しつゝ、茲に泰西哲人文豪を捋し來り、その思想を平明に解説し、更に思想の背景たるその生活を簡明に叙説し、讀書界諸賢の考察研鑽の一助たらしめんと志した次第である。

輕躁浮薄なる時流に慨する諸君士は、この小著を一讀せられ、更に自ら好まるゝ文豪哲人を選定の上、その著述作品に就き十二分の心讀味倒を試みられんことを希求する。かくして得られたる信念の上に立ち、銳意思の善導に盡さるゝならば、これ寔に邦家のため慶賀すべきことであると信ずる者である。

著者誌

哲人人生を語る 目次

シエークスピヤ

その前半生……………一

その後半生……………三

シエークスピヤの作品……………六

彼の實生活と作品……………一三

ハムレットの梗概……………一五

ハムレットの藝術的價值と作品に現れたる人間觀……………二四

愛と結婚に關するシエークスピヤの見解……………二六

ロミオとジリエットの梗概……………三〇
 「ロミオとジリエット」の價值……………四四
 「十四行詩」に表れたる戀愛觀……………四五

ゲーテ

その生立……………四九
 「若きエルテルの悲しみ」……………五〇
 作の主題と價值……………五三
 厭世觀から人道主義へ……………五四
 不滅の名大作「ファウスト」……………五六
 「ファウスト」の梗概……………五七

「ファウスト」に現れたる思想と作の眞價……………七〇
 ツルゲニエフ
 その生立……………七四
 ロシヤの國民性とその文學……………七五
 ツルゲニエフの作品……………七六
 「ルーヂン」の梗概……………八〇
 ルーヂンの性格と時代思潮……………八八
 藝術家としてのツルゲニエフ……………九〇

ゾラ

その生立……………九三

「ルウゴン・マツカール」叢書……………九四

「實驗小説」とは何ぞや……………九五

「居酒屋」……………九七

その梗概……………九八

「居酒屋」の内容批判……………一〇五

藝術家としてのゾラ……………一〇八

ゾラの正義感と社會改造の理想……………一一〇

★バイロン

その生立……………一一三

バイロンの學窓時代……………一二五

第一回の外遊と「チャイルド・ハロルドの巡遊」……………一二八

バイロンの結婚生活……………一二九

第二回の旅行と彼の傑作……………一三三

「マンフレッド」の梗概……………一三四

最後の情事と彼の戀愛觀……………一三一

詩人の最後……………一三五

フローベエル

その生立……………一三七

その作品……………一三八

「ボヴリイ夫人」の梗概……………一三九
「ボヴリイ夫人」の内容と價值……………一四五
藝術家としてのフローベエル……………一四八
フローベエルの「一語説」……………一五〇
藝術上の「無感覺」……………一五三

ドストイエフスキイ

その生立……………一五四
「カラマゾフ兄弟」其他……………一五五
「罪と罰」の梗概……………一五七
「罪と罰」の價值と内容……………一六一
藝術家としてのドストイエフスキイ……………一六四

彼とトルストイとの比較……………一六六

トルストイ

その生立……………一六九
「戦争と平和」……………一七一
「アンナ・カレリーニナ」……………一七二
トルストイと兩性問題……………一七四
「クロイツェル・ソナア」……………一七七
「クロイツェル・ソナア」に現れたる思想……………一七九
晩年の傑作「復活」……………一八三
「復活」の梗概……………一八五

「復活」とトルストイズム……………一八八
「復活」と社會問題考察……………一九〇
「復活」とキリスト思想……………一九四
「復活」の藝術的價値……………一九八

イプセン

その生立……………一〇〇
初期の作品と彼の思想……………一〇一
最初の傑作「ブランド」とその思想……………一〇三
イプセンと兩性問題……………一〇四
「人形の家」の梗概……………一〇六

「人形の家」の思想の中心……………一二二
イプセンの社會劇に於ける新らしい女……………一二四
「幽霊」と「海の夫人」……………一二五
「幽霊」の荒筋……………一二六
「幽霊」に現れた思想……………一二八
「海の夫人」の筋と思想……………一二九
「ヘツダ・ガブレル」とその主觀的内容……………一三二

ストリンドベリイ

その生立……………一三六
彼の學窓時代……………一三八

第一期創作時代……………二二〇

第二期創作時代……………二三一

第三期創作時代……………二三四

彼の死……………二三六

人としてのストリンドベリイ……………二三七

ストリンドベリイの女性観……………二三九

「ユリイ嬢」……………二四二

「債鬼」……………二四五

「父親」……………二四六

三部曲に現れたる作者の両性観……………二五一

モウパッサン

その生立……………二五四

モウパッサンとフローベール……………二五六

小説家としての彼の功績……………二五八

モウパッサンの性格……………二五九

「美貌の友」の内容……………二六一

「美貌の友」と彼の女性観……………二六六

「水の上」と藝術家の特質……………二七〇

モウパッサンの發病前後と其作品……………二七三

彼の狂氣と恐怖感……………二七六

ワイルド

その生立……………二八二

英國唯美主義の経路……………二八二

唯美主義とは何ぞや……………二八四

「架空の頽廢」の主張……………二八九

作品の主なるもの……………二九一

「ドリアン・グレイの畫像」の荒筋……………二九二

「ドリアン・タレイの畫像」の批判……………二九五

「ドリアン・グレイの畫像」と希臘思想……………二九八

「ドリアン・グレイの畫像」に對する批評と作者の反駁……………二九九

タゴール

ラルタア・ペイタアの批評と作の眞價……………三〇三

ワイルドの投獄と文藝對道德問題……………三〇六

その生立……………三二二

詩聖の來朝……………三二五

平和郷に於ける彼の生活……………三二八

詩人としてのタゴール……………三三〇

劇作家としてのタゴール……………三三九

梵^{ブラマ}の哲理……………三三九

自我の否定……………三三九

善悪の觀念……………三三四

タゴールの死生觀……………三三六

愛の生活……………三三七

メエテルリンク

その生立……………三三九

戯曲家としてのメエテルリンク……………三四一

メエテルリンクの象徴主義……………三四四

後期に於ける彼の作品……………三四六

「青い鳥」の梗概……………三四八

「青い鳥」に象徴せらるゝ思想……………三五三

メエテルリンクの戀愛觀……………三五八

彼の戀愛觀を代表する二作……………三六〇

ロマン・ローラン

その生立……………三六五

世に出でたる後のロマン・ローラン……………三六八

初期の作品に就て……………三七一

民衆のための藝術……………三七五

「革命の戯曲」に就て……………三七七

偉人の傳記に赴いた彼……………三八〇

「ジャン・クリストフ」の内容……………三八三

「戦の上にあれ」……………三六八
 小説「クレランボー」に就て……………三九二

ルソオ

その生立……………三九五
 學界に出てからのルソオ……………三九七
 哲學に就てのルソオの見解……………三九九
 宗教觀よりの道德觀へ……………四〇一
 人間不平等は如何にして起るか……………四〇四
 「民約論」に就て……………四〇九
 教育上の自然主義……………四二一

その生立……………一五
 教壇のカント……………四二六
 カントの性行……………四二七
 カントの思想發達の四期……………四二八
 カントの著述一般……………四三〇
 知識論……………四三三
 純直觀の形式……………四三五
 悟性の概念……………四三七
 十二の範疇……………四三八

超個人的主観……………四三〇
 形而上學……………四三一
 道德論……………四三四
 カントの美學論……………四三八

シヨペンハウエル

その生立……………四四二
 主著より見たるシヨペンハウエル……………四四四
 主著完成後のシヨペンハウエル……………四四六
 現象としての知識の世界……………四四八
 意志としての世界……………四五二

藝術的考察に依る解脱……………四五四
 實際的なる解脱……………四五六

コント

その生立……………四五九
 コントの結婚生活と婦人観……………四六一
 コントの戀愛事件と戀愛觀……………四六二
 三階段の法則……………四六四
 科學の分類……………四六七
 コントの社會學……………四七〇
 神祕家としてのコント……………四七四

ミル

その生立……………四七九

彼の少年時代と宗教……………四八〇

彼が思想上の變轉期……………四八一

實際的活動に於けるミル……………四八三

歸納的倫理學……………四八五

倫理學の原理……………四八七

ミルの個人對社會觀……………四八九

婦人問題に對するミルの立場……………四九一

代議制に關するミルの主張……………四九二

社會問題に關するミルの見解……………四九三

宗教に對するミルの見解……………四九六

スペンサア

その生立……………五〇一

哲人としての彼の生涯……………五〇二

宗教と科學との關係に就て……………五〇四

統一的知識としての哲學に就て……………五〇八

進化論としての哲學に就て……………五〇九

進化の概念に就て……………五一二

進化論より出發せる彼の社會學に就て……………五一五

ニイチエ

その生立……………五二九

普佛戦争前後……………五二

ニイチエの著書一般……………五三

名著「ツアラトストラ」……………五五

「ツアラトストラ」梗概……………五八

「ツアラトストラ」の中心思想……………五七

超人の哲理……………五四一

ニイチエの個人主義……………五四四

ベルグソン

その生立……………五四七

直覺的研究法……………五四八

形而上學と科學……………五五二

理知と直覺……………五五四

物質と生命……………五五七

創造的進化……………五六〇

—— 目次終 ——

シェークスピア

その前半生

ウァーキック州のストラットフォード・オン・エーヴオンに、ジョン・シェークスピアといふ人が住んでゐた。この人こそ詩聖キリヤム・シェークスピアの父である。キリヤムは一千五百六十四年に生れた。その正確な誕生日は不明である。彼の墓碑には、「一千六百十六年四月二十三日歿、行年五十三歳」と記してある。これから察すれば、遅くも四月二十日頃に生れたものであらう。

キリヤム・シェークスピアの教育に就ては何等の記録もない。當時の小學校へは勿論通つたであらう。父親が事業に失敗したために、廢學して父の仕事を手傳つたといふ記録は殘

つてゐる。

一千五百八十二年、キリアムはアン・ハサエイと結婚した。アンはキリヤムよりも八歳の年上であつた。長女スザンナは、結婚後六ヶ月で生れてゐる。二人が戀愛から結婚に進んだことは明かである。

シークスピヤは、一千五百八十六年頃、家族を遺してロンドンに飛び出した。そして直ちに劇場と関係をつけた。二年の後には、劇作家の一人として名が出たやうである。

1210
1869
786

一千五百九十三年に出版された「ギーナスとアドーニス」と題する詩集は、サザンプトン伯に献じたものであるが、これにはキリヤム・シークスピヤの署名がしてある。おそらく彼自ら校訂し監督して出来た詩集であらう。この當時の出版の習慣として、貴族か保護者に献本することになつてゐた。第二の詩集「ルークリース」は、一千五百九十四年に出版された。これも同じサザンプトン伯に献じられてゐる。

彼は詩を書くと同時に、俳優としての足場を固めて行つた。チンプ及びバーベーチの名優と共に、彼はチャンバレーン卿の保護の下にあつた俳優團の一人として呼び出され、エリザベス女皇の御前で、二つの喜劇を演じた。

一千五百九十七年、彼はストラットフォード第一の邸宅「新屋敷」を買つた。その後も、彼はロンドンで得た財力を郷里の土地や家屋に投資した。彼は更に、ロンドンのブラックフライヤース劇場近くに家屋を買つた。

その後半生

一千五百九十八年、「リチャード二世」戀の骨折損」が、クォート版として出版された。ま

た同年、ベン・ジョンソンの「十人十色」で、彼は主役を勤めて好評を博した。

エリザベス女王の崩御、それに引續いてジェームス一の即位があり、シェークスピアは名實共に戯作家、俳優として活躍出来る時節が到来した。彼はその作品が聲價を増して來るに従ひ、俳優として舞臺に立つことを次第に控へるやうになつた。

シェークスピアが、ロンドンの演劇界を去つて郷里のストラットフォードに隠退した年月は不明である。多分それは一千六百十一年頃であらう。フレッチャアとの合作と言はれてゐる「ヘンリー八世」を最後として、餘生を郷里に送ることにしたものらしい。

彼の健康は、一千六百十六年になつてからはあまり勝れなかつた。その年の一月廿五日に、ウォーキツクの法律家フランシス・コリンズに託して遺言狀を起草させた。それから二三ヶ月して、詩友ドレイトン及びジョンソンを己が家に招待して、饗宴を催した。この歡

會にシェークスピアは痛飲又痛飲、遂に度を過してそれが因となつて發熱して死んだと言はれてゐる。

彼は一千六百十六年四月廿五日、ストラットフォード教會の北隅に葬られた。墓の上に次の詩句が刻まれてゐる。シェークスピア自身の作である――

わが友よ、神のみむねに逆つて、

こゝに埋められたるむくろを掘るなかれ、

この墓に手をかけぬ者は祝福されよ、

このむくろを動かす人は呪はれよ。

シェークスピアの死後廿五年、ベン・ジョンソンは次のやうな言葉^{ことば}を發表した。

「私は彼を愛する。私は偶像視するまでに彼を尊敬する。彼は實に尊敬すべきであつて、

その性情は實に公明正大である。」

これによつて推察しても、シェークスピヤの性格は温厚で、容貌も上品で、正直な人物であつたらしい。

シェークスピヤの作品

シェークスピヤの初期の作品は、多くは韻文で書いてある。然し晩年には韻文は少なくなつてゐる。シェークスピヤの作品を四期に分つて列べて見ると――

第一期に屬するもの

喜劇

戀の骨折損

間違ひの喜劇

ヱロトナの二紳士

史劇

ヘンリー六世(第一部)

ヘンリー六世(第二部)

ヘンリー六世(第三部)

リチャード三世

ジョン王

悲劇

タイタス・アンドロニカス

第二期に属するもの

喜劇

眞夏の夜の夢

ゼニスの商人

じやく馬馴らし

キンゾアの陽氣な女房達

から騒ぎ

お氣に召すまゝ

十二夜

史劇

リナチード二世

ヘンリー四世(第一部)

ヘンリー四世(第二部)

ヘンリー五世

悲劇

ロミオとジュリエット

ジュリヤス・シーザア

第三期に属するもの

喜劇

トロイヤスとクレシダ

終りよきものはみなよし

以尺數尺

ペリクリース

悲劇

ハムレット

オセロー

マクベス

アゼンスのクイモン

アントニーとクレオパトラ

コリオシーナス

第四期に屬するもの

浪漫劇

シンベリン

テンベスト

二人の親戚貴族

史劇

ヘンリー八世

第一期、即ち一千五百九十年以前から一千五百九十三年までの作品は、シェークスピアの修業時代であつて、古典劇こてんげきや同時代の作家の影響を受けたり、それらの脚本を模倣した時代であつた。

史實を題材とする史劇は、エリザベス王朝の演劇の特徴であつて、シェークスピアは第一期に於て多くの史劇を書いた。

第二期に於て、シェークスピアは幾多の優れた喜劇を書いた。そして作劇上の技巧の著しく洗練されたことを實證した。史劇に於ても、第一期のそれよりも材料を自由に劇化してゐる。第一期の史劇が純然たる悲劇として終つてゐるに反し、喜劇的要素が加つて居る。喜劇には殊に優れた作が多いが、「眞夏の夜の夢」は詩的想像から生れた華かな詩であり、「ゼニスの商人」は劇的効果を高める要素である科白の調和に作者の靈腕を見ることが出来る。

悲劇としては「ロミオとジュリエット」「ジュリアス・シーザ」がある。いづれも、彼の悲劇が倫理的であり、性格より起る破綻を描き、運命の神祕を示すものであることを、明瞭に看取することが出来る作品である。

第三期は、「ジュリアス・シーザ」と共に四大悲劇と呼ばれる「ハムレット」「オセロー」「マクベス」を書いた重要な時期である。こゝに至つて作者は全く傳統を離れ模倣を脱し、彼獨特の境地を開拓してゐる。

第四期は、その脚本の大部分を支配してゐる力が、喜劇よりも悲劇であつて、而も大團圓から見れば喜劇に屬する作品が出て居る。故に、それらの作品を、悲喜劇といひ、又劇的ロマンス、浪漫劇と呼んでゐる。

彼の實生活と作品

シェークスピアは、詩人として偉大を成す天分を生れながらにして有つてゐたのである

から、情感も人一倍強かつたに違ひない。人生を享樂するに當つても、また人生の苦痛を味ふに於ても、凡俗より強く劇しかつたに違ひない。

然し彼には自然主義的傾向や寫實派的特質が全然無かつたので、その體驗を直ちに作劇に反映せしめようとしなかつたことは明かである。その長男ハムネットが死んだのは一千五百九十六年であつた。而もその年に、彼は「ゼニスゼニスの商人」や「じやく馬馴らし」のやうな喜劇を書いてゐる。またフォールスタッフフォールスタッフの如き諧謔かいぎやくそのものゝ人物をも作り上げてゐる。

「リヤ王」や「オセロー」の如き作品を書いたのは、彼が經濟上も非常に豊かになり、實生活では恵まれた時代であるから、これらの悲劇は彼の直接の悲しい經驗から生れたものといふよりは、深刻な思索と潑刺たる想像の賜として生れた作品と見るのが至當であらう。

初期の諸作には、習作時代の常として、やゝ模倣に過ぎるやうに見える作もあるが、それは必ずしも模倣ではなくて、一般觀客から歡迎される形式が、既に完成されてゐる演劇の形式中に多かつたので、それを躊躇ちゅうちよせずに入れたまでである。

史劇より、喜劇へ、血生臭い悲劇より、復讐悲劇へ、更に劇的ロマンスへと、雑多の戯曲を書いてゐるが、これらの演劇形式も、決して彼の獨創ではなく、彼以前又は同時代の劇作者によつて試みられてゐる。彼が劇作者として、文學者として、藝術家として偉大なる所以は、作品の種類や數の多い事實に依るのではなくて、作品さくひんに盛られたる内容、即ち精神と風格の秀拔に依るのである。

ハムレットの梗概

デンマーク王ハムレットの急死のために、王妃ガートルードは寡婦となつた。彼女は王の死後二ヶ月もたない内に、王の弟クロードィアスと結婚した。このクロードィアスは、兄のハムレットと異つて卑劣極まる人物だつたので、人々は彼が王位に即きたいために兄王を暗殺したのではあるまいかといふ疑ひを抱いてゐた。クロードィアスは當然王位に即くべき王子ハムレットを退けて自ら位に即いたのである。

先王の人格に服してゐた王子ハムレットは、母と叔父との結婚を非常に不快に思つてゐた。父王を喪つた悲しみ、母の不貞を憤る憂鬱の中に、王子は何の楽しみもなく日を重ねた。彼は當然即くべき王位を奪はれて恨んでゐるのではなかつた。彼の高潔な心には王冠は何の價値もなかつた。先王は后ガートルードを愛してゐた。彼女もまた先王を愛してゐた。然るに、先王逝いて二ヶ月も経たぬに彼女は結婚した。而も下劣なクロードィアスと

不法の結婚をしたのである。かゝる事情は高潔な王子ハムレットの心に暗い影を投げずにはゐなかつた。

ガートルードは、どうかしてハムレットの心を明るくしようと思つたが、彼は何時までも喪服を脱がなかつた。もう一つハムレットの胸を暗くするのは、庭園で毒蛇に噛まれて死んだといはれる父王の變死であつた。ハムレットは、叔父のクロードィアスこそ、その毒蛇ではないかと疑つた。若しこの疑が眞實ならば、母のガートルードも暗殺に加擔してゐたのではないか。

かうした疑ひを抱いてゐた際に、ハムレットは、宮殿外の高臺に、先王そつくりの幽霊が現れるのを夜番の武士が三晩もつゞけて見たといふ噂を聞いた。毎晩十二時を合圖にその幽霊は現れる、ハムレットの親友ホレーシヨもそれを見た一人であつた。

このことを聞き込んだハムレットは、自分の抱いてゐる疑を解くために、先王の幽霊が、この世に現れるのではないかと考へた。そこで彼は、夜番の者やホレーシヨには他言を禁じておいて、夜になるのを待った。

十二時近くなつたので、ハムレットはホレーシヨを促して幽霊の現はるといふ高臺へ行つた。現れた、十二時が打つと共に幽霊は現れた。いかにも先王の亡霊である。ハムレットは言つた――

「おゝ、デンマークの父君よ、お答へあれ！われをして疑惑に心を碎らしめ給ふな。尊き御法の式を盡して正しう葬られたまうた御軀が、何とて蠟引の墓衣を破り、静閑に御遺骨を埋めまゐらせる陵が、何とて盤石の顎を開いて、又も御骸を吐出だいたるぞ？」

すると幽霊は、ハムレットをさしまねいで、もつと遠くへ附いて來い、そこで誰にも見られずにお前と話したいことがあると云ふやうに見えた。ハムレットは後を追うた。二人だけになると幽霊は沈黙を破つて、先王の靈であることを告げ、弟クロードニアスから暗殺せられたことを告げた。

先王は毎日庭園に午睡するのが習慣であつた。クロードニアスは祕かに忍び寄つて、毒汁を先王の耳に注入した。先王は忽ちこの世を去つたのであつた。幽霊はハムレットに、この残酷な毒殺の復讐を迫つた。王子が復讐を誓ふと幽霊は消えてしまつた。

ハムレットは決心の臍を固めると、發狂を装うてクロードニアスの安心を求め、復讐の機會を待つた。彼は先王の死によつて、悲しみの餘り發狂したと見せかけた。然し彼の周囲の人々は、悲しみからばかりではなく、戀愛のためでもあらうと臆斷した。

ハムレットはかく憂鬱に陥る前に、王の相談役ポローニヤスの娘オフィリヤといふ少女を

愛した。ハムレットは彼女に手紙や指環を贈つて、優しくしてゐたが、憂鬱になつてからは彼女を忘れ、亂暴な言動すら向けるやうになつた。オフィリヤは、それを王子の心の狂ひからとばかり思つて、恨みとしなかつた。娘への手紙を見たポローニヤスは、ハムレットの發狂を戀情からと早合點して、そのことを王と王妃に知らせた。すると王妃は、オフィリヤの力でハムレットの狂亂を廢したいと願つた。然しハムレットの心の暗さは、オフィリヤの愛の眞心でもどうすることも出来なかつた。

ハムレットがかくの如く復讐の機會を待ちあぐんで悩んでゐるところへ、旅廻りの俳優一座がやつて來た。ハムレットは俳優達に、一つの悲劇を演じてくれと頼んだ。その筋は、ピエナといふ國の、ゴンザロといふ公爵が、庭園に午睡してゐると、ルシアナスといふ近親が、毒汁を公爵の耳に入れて毒害し、公爵夫人を己が妻とするといふのである。

ハムレットは、王や王妃を招いてこの脚本の上演を見物させることにした。そしてクロードニアスの近くに座を占めて、王の顔色が如何に變るかを見守つてゐた。

劇は公爵と夫人との會話から始まつた。夫人が自分は公爵がこの世を去つても二度と結婚はしないと誓ふところへ來ると、クロードニアスの顔色がそろ／＼變つて來た。劇が進んで、ルシアナスが公爵の耳に毒を注ぐところへ來ると、彼は座に堪へられなくなつて遁げてしまつた。ハムレットは自分の疑惑を確めることが出來た。

いよいよ復讐をしようと思つてゐる時、母の王妃はハムレットを居間に呼んだ。母は父君に對して不埒を爲たと言つて王子を責めた。王子は、母上の心の奥底までも鏡に掛けて見せて上げようと言ふ。

この時垂帳の蔭に人聲がしたので、ハムレットは劍を抜いて刺した。それは立聞きしてゐ

たポローニヤスであつた。ハムレットは叔父クロードディアスであらうと思つて刺したのであつた。彼は王妃に近づき、二つの肖像を出して――

「これ御覽ぜ、この繪姿とこの肖像、血を分けた兄弟ながら、この君の氣高さ立派さ。姿容の美を集めてあつばれ人間の鑑ぞと、あらゆる神々が極印をば附けさせられたと見ゆるこれこそ前の御夫。さて此方を御覽ぜよ、これが今の御夫ぢや。黴の着いた麥の穂同然健かな兄穂を枯らす人非人。母上、こなたは目が無いか……」と責め立てる。王妃も今や悔悟の涙を浮べ、王子の言葉は劍のやうに首を刺すと嘆く。

ハムレットがポローニヤスを刺してからは、クロードディアスは急に怖れを抱いて、彼を海外へ放逐する計畫を立てた。ハムレットは二人の使者と共に英國へ遣されるが、途中で海賊船に襲はれた。ハムレットは海賊を破つて、單身再びデンマークに上陸した。

歸國した最初にハムレットの眼を驚かしたのは、オフィリヤの悲しい葬式であつた。彼女は父を失ひ、戀を失ひ遂に發狂して河に身を投じたのである。葬式を見ると、昔の愛情がひし／＼身に迫り、ハムレットは墓穴へ飛び込んで愛を告白する。オフィリヤの兄レーヤチーズは、父の仇妹の仇と呼つてハムレットと決闘を始める。然し二人は引分けられて其場はそのまゝになる。

クロードディアスは、レーヤチーズの憤りを利用してハムレットを亡きものにしようと思ひハムレットに劍闘を申し込ませた。クロードディアスは毒を塗つた劍をレーヤチーズに與へてハムレットを殺す計畫であつた。

仕合は始つた。最初はハムレットの勝であつた。クロードディアスは立つて祝盃をハムレットにさした。ハムレットは盃をそのまゝにしておいて仕合を續けた。彼はレーヤチーズの

ために毒劍で傷けられた。が、仕合をつづける中にレーヤチーズの劍を打落して、何時の間にか二人の劍は取換へられた。ハムレットも毒劍を以てレーヤチーズを傷けた。

仕合が終ると、王妃は「ハムレットの勝利のために」と言つて、王からハムレットに與へた盃を飲み干した。それはレーヤチーズが目的を果さぬ時に、ハムレットを毒殺しようとしてクロードィアスが用意したもの、王妃はその毒酒を飲んだのである。

レーヤチーズは息を引取らうとする間に、一切の陰謀をハムレットに打明けて許しを乞うた。陰謀の發頭人がクロードィアスと分ると、ハムレットは直ちに彼を刺し殺し、ホレーシヨに後事を託して靜かにこの世を去つた。

ハムレットの藝術的價值と作品に現れたる人間觀

シェークスピヤのこの作以前に、別に「ハムレット」といふ劇があつて、シェークスピヤはそれを改作したのだらうといふ説もあるが、原本も作者も不明である。同時代の悲劇作者キッドには、同一名の作品があつて、シェークスピヤのそれと、構想も境、遇も、動機も似た點がある。

して見ると、シェークスピヤは、同時代の劇作家の手法を學び、傳統を追ひ、技巧を繼承したと見ることも出来る。それにも拘らず、この作は、作劇上から見て全然独自の價值を有つものである。この作から、詩と哲學とを取去つても、まだ充分に觀客を索き付けることが出来るであらう。

この作は、眞に時代を超越し、國境を撤廢して、いかなる階級の觀衆をも魅了すること出来るものである。幽靈の場面から始まり、劇中劇、オフィリヤの狂亂、墓地の場面から

最後の劔闘の場面に至るまで、實に渾然たる劇的技巧を發揮してゐる。

外面的には、復讐と、策略と、流血とが交錯し、内面的には、主人公の苦惱と憂鬱、純な少女の情緒と哀愁、邪悪なる者の悔恨と懊惱とが錯交して、嘗て見ることの出来なかつた複雑な内容の表現となり、流血の悲劇と、思想劇と、性格悲劇とを合同して、一の偉大なる藝術境が出来上つたのである。

ハムレットなる主人公は、いかなる時代のいかなる國にも生存し得るであらう。彼の有つ思想は代表的な人間の思想であり、彼の經驗した感情はあらゆる人間に經驗されるであらうものである。

たゞ、ハムレットの性格は、研究すればするほど不可解になるといつてよいまでに複雑である。ゲーテは、ハムレットを評して、「彼は丁度高貴な鉢に植えられた櫟の木が、根を張つ

て遂には鉢にも裂目が出来たやうなものである。彼は英雄となるには意志の力が足りない、偉くて、高貴で、善良な若者が、おもひ重荷の下に押へられて、その重荷を背負ふことも出来ねば、投げ棄てることも出来ないやうなものだ、」と言つてゐるが、これなどもハムレットの一面の性格評としか思はれない。彼が父王の幽靈に近付く時の態度を見ても、英國へ送られる途上で慄悍な海賊を討つ力を見ても、彼は決して臆病な青年でなかつたことが分る。平素の彼は、快活で率直で、丁寧で親切な人であつたに違ひない。而も彼には、神経質な一面もあれば、哲學者の思索もあり、文學者の敏感もあつた。

主人公ハムレットに比すれば、他の人物は悲劇的標準に達し得ない小人物のやうにも見える。が、それは大悲劇の主人公ハムレットを偉大ならしめて感激を徹底せしめるための劇的手法とも考へられる。また、この世に現存する人物の概して卑小である證左として受取

れぬこともない。

この作を通じて見るシェイクスピアの人間観は、彼が運命の支配の下に於ける人間の弱さを信じた點である。兇悪なるクロードディアスも運命の前には屈服した。英雄的なハムレットも運命に抗し得なかつた。可憐なるオフィリヤに至つては、餘りにも脆い弱い存在を見せられた。かくてこの戯曲は、境遇悲劇であり性格悲劇であると共に、人間の力で如何とも仕難い運命の悲劇である。

愛と結婚に関するシェイクスピアの見解

シェイクスピアの戀愛の標準は、大體次のやうに言ひ表はすことが出来る。戀愛は 自然にして都合よき釣合をとつて、胸裡、腦裡、官能を燃やす情熱である。熱烈なれども肉慾的ならず、繊美なれども感傷的ならず、純真なれども禁慾的ならず、道德的なれども清教徒的ならぬ情熱である。

シェイクスピアの描いた戀人たちは、勿論のこととして結婚を期待想望する、然し彼等の多くは喜悅し陶醉してゐるが、淫逸貪亂いんいつどんらんではないから、結婚の權利を主張強要したり、また忽然として他に愛情を轉向するやうなことはない。而も彼等は通常一身に戀着し、その戀情を永久に持續する。従つて結婚を想望さうぼうしないやうな戀愛關係は彼の戯曲中に滅多に現れて來ない。かのゲーテの「ファウスト」中に見るグレーチェンの悲劇に似たる愛戀は、シェイクスピアの興味を牽かなかつたらしい。ロミオのロザリンドに對する愛は、彼のより大なる戀、即ちジェリエットに對する愛への辨に過ぎない。クロードディオのジェリエットに對する戀は偉大なる劇の脚色上必要に迫られて挿入した一條件に過ぎない。

シェークスピヤの描いた結婚生活は、未婚の戀人同志の表現に對を成すものである。彼の取扱つた夫と妻とは、若々しい放縱ほうじゆうに陥ることがない。彼等は愛を語ることにすら殆ど絶無といつてよい。とは言ふものゝ、彼は決して倫理學說に盲從し、既成道德に拜跪したのではない。彼の描いた男女は、悲劇に現れて情熱を高調し、喜劇に現れて機智諧謔を弄し千姿萬態の妙境を作り出してゐる。

彼が戀愛を骨子とした作の數多い中に、英本國に於てのみならず、東西諸國の讀書界を魅了し演劇界を風靡したのは「ロミオとジュリエット」である。

ロミオとジュリエットの梗概

エローナの町の富豪にキャピュレットとモンタギューとの二家があつた。この兩家の間には

互の祖先同志の古い争ひが根になつて、代々敵同志のやうに睨み合つてゐた。主人と主人とは言はずもがな、一族家來、はては出入の者に至るまで、妙に敵意を持つて相對し、寄ると觸ると悶着もんちやくを起して街を騒がしてゐた。

ある日、キャピュレット家の老主人は、美しい淑女たちや、身分の高い紳士連を多勢招いで、大晩餐會を開いたことがあつた。モンタギュー家の人々でない限り、エローナの町の美しい人達は、皆この會に招ばれて行つた。

そしてこの宴には、モンタギュー家の息子のロミオが、日頃愛してゐたロザリンドといふ女も來てゐる筈であるが、エローナの評判の美人連びじんれんを見るならば、彼もロザリンドを諦めるだらうと思つた友人のベンボリオが、その夜の宴會場へ忍び込まうとロミオを誘つた。ロザリンドといふ女は、ロミオが夜も眠らずに戀してゐるにもかゝはらず、彼を輕んじて

少しも顧みてくれないのであつた。

その夜ロミオは、ベンボリオやマーキュシオと、思ひくの假装をして、假面で顔を匿して、キャピュレット家の饗宴場へ出掛けて行つた。主人をはじめ一族の者は、仇敵の人々と知らずに、多くの他の賓客と一緒に喜んで彼等を迎へた。

燈火はまばゆく、音楽は賑かであつた。人々は思ひくの組を作つて踊り狂つた。ロミオは、ふと、踊り回る人々のうちに一人の飛び抜けて美しい女に気が付いた。

「あゝ、今夜といふ今夜まで、俺はほんとうの美人を見なかつたのだ」と彼は呟いた。その呟きを聞いて、キャピュレット老公の甥のタイバルトは、彼がロミオであることを看破した。彼は、わが一門を辱かしめた不埒者、殺させてくれと公爵に願つた。然し老公は、エローナ中の褒められ者の青年だからと、タイバルトを宥め憐して思ひ止らせ、會場の陽氣

さを保つことに努めた。

この間に、巡禮姿のロミオは、美しい女に近付き、跪いてその手を把り、つゝしみ深い譬の言葉にかこつけて、切なる思ひを知らせた。女もまた、それを嬉しく受けるのであつた。

ところで、その女はキャピュレット家の秘藏娘ジュリエットであつた。やがて兩人は、その悲しい事實の發見に且驚き且嘆き、何といふあさましい因果な戀の回り合せであらうと人知れず泣いた。

夜も更けた頃、舞踏場から出たロミオは、戀に引かれて暗の中に身をまぎらせ、いはば敵陣の中へと忍び込んだ。そして遣つてゐるうちに、偶然にも戀人の窓の下に來てしまつた。やがて窓が明いて、燈の光が洩れ、輝くやうなジュリエットの姿が立ち現れた。

「おゝわが太陽よ！」と彼は呟いてその姿を仰ぎ見た。ジュリエットは戀しい男の居るとは知らず、溜息まじりにかう言つた、「ロミオさま！ 何故にあなたはロミオといふお名をお持ち遊ばす、妾のために、ロミオといふお名も、モンタギューの名も、お棄て下され。いゝえ、妾の戀人にお成り下さらば、妾はキャピュレットといふ名を棄てしまひませうに。」

ロミオは堪らず身を現し、「それならば、余を戀人と呼び給へ」と叫んだ。ジュリエットはわが戀人と知ると、彼の身の危険を案じてそれを告げた。するとロミオは、戀のためなら生命も惜しくないと答へた。然しジュリエットは、今宵芽した戀の蕾を、大切に二人の胸の中に秘めて育て上げ、今度逢ふまでには、美しい花として咲かせたいものだと言つた。その時彼女は、乳母に呼ばれたので、もしあなたの心に虚偽が無かつたら、明日使を上げた時に、何時何處で誓ひの式を擧げようといふ返事をして下さい、さうすればもう

妾の一生はあなたのもの故、世界の端までも従ひませうと約束して、惜しい別れを告げ、奥へ姿を隠してしまつた。

夜が明けるとロミオは、常々心安くしてゐるローレンスの庵室へ出掛けて行つた。上人はロミオが、つれないロザリンドのことを訴へに來たのだらうと思ひ、彼を親切に庵室へ導いた。然しロミオは、昨夜の出來事を悉く打ち明け、今日直ぐ、神聖な神前の誓ひの式を擧げてくれと頼んだ。

ローレンス上人は、若い者の心の移り易さを、やゝ心元なく思つたが、この縁組が因でキャピュレット家とモンタギュー家との長い確執が無くなればこの上もない目出度いことと思つたので、ロミオの願ひを聞き入れることにした。で、その日の午後ロミオとジュリエットとは、夫と呼ばれ、妻と呼ばれる神聖な式に臨むことが出來た。

ロミオが式を済ませて歸る途中、街の真中で、タイバルトと同伴の二三人は、モンタギュー家側のベンボリオ、マーキュシオと言ひ争つてゐたが、ロミオの姿を見ると、タイバルトは彼の方に向き直つて喧嘩を賣つた。常ならば許すところではないが、ジュリエットと結婚した身であることを思ひ、タイバルトがジュリエットは従兄妹の間であることを思つて、じつと怒りを制へてそこを通り過ぎようとした。それを見たマーキュシオは痛癢を起し、進み出てタイバルトと果し合ひを始めた。ロミオは引止めたが及ばず、やがてマーキュシオは仆されてしまつた。今はこれまでと、ロミオはタイバルトに立ち向ひ、遂に復讐を果してしまふ。とそこへ、キャピュレットの人々やモンタギューの人達、領主なる公爵も多くの従者を引連れて集つた。領主は兩家が確執を續けて街を騒がした不心得を責め、兩家に重い償金を申渡し、なほ殺人罪を犯したロミオには、マンチュアへの追放を宣告した。

た。これを聞いたジュリエットは、悲嘆のあまり氣も狂ふばかりであつた。ロミオと別れて暮す位なら、ロミオの妻として死にたいと思ひ、彼女は處女の指環を抜き取つてロミオに渡してくれと乳母に託した。

決闘が済んで、ロミオはローレンスの庵室に逃れてゐたが、死よりも恐ろしい宣告を受けて、ジュリエットを見られない土地に身を置くよりはと、自ら短劍を胸に突て立てようとした。

ローレンスは驚いて押止め、今夜は戀人のところへ忍んで行つて、女を慰め、夜明け前にはこのズローナの土地を離れるがよい、自分は折を見てこの結婚を公にし、兩家の確執を調停し、領主の許しを願つて呼び戻して上げようと説き、彼の不心得を諭した。ロミオが劍を離して、ほつとしたその時、ジュリエットの使として、乳母が彼女の指環を持つて來

た。

その夜、ロミオは戀人の部屋に忍び込み、夜もすがら楽しく語り、いや深く契り合つた。然し、甘美な歡樂の夢は、あまりにも短かゝつた。やがて曙の空氣は動き、雲雀の聲をジュリエットは夜啼鳥の聲だと言つたが、はや明るい晴やかな朝日の光が室に覗き込まうとして居た。いち早くゴローナを去らなければ殺されてしまふだらうと、氣が氣でないロミオは、引止めるジュリエットの心づくしをうれしく思ひながら、名残のキスを與へて窓を迂り下りた。

その後で、ほつと溜息をつく間もなく、領主の身内なる、パリスといふ貴公子が、彼女への縁談を持込んで來た。パリスは地位もあり領地もあり才氣も秀れた若者であつたので、キャピュレット家では、娘の良人として迎へるに何の不足もないと思ひ、娘には一言の

相談もなく、二つ返事でその縁談に快諾の返事をしてしまつた。それどころか、次の木曜日には、祝言の式を擧げることまで取決められたのである。

かうなると、ジュリエットの唯一の身方なる乳母までが、ロミオに對して雜言を吐き、パリスとの縁談を勧めるのであつた。ジュリエットは、われ一人の分別ではどうにもならなくなつたので、高德の上人ローレンスの前に身を投げて、悲嘆の限りを打ち明けた。そしてパリスと結婚しないで済むならばと、懷劍を取出して自殺を計りさへした。

ローレンスは苦慮の末一策を案出した。彼はロミオに逢ふためにはどんな事でもするといふ彼女に眠り藥を渡した。その藥は、飲む最初は酷く惡寒を催し、終には死人と同様になるが、四十二時間経てば再び甦るといふものであつた。で、パリスとの縁談を承諾して皆の者に油斷させ、明後日が婚禮の日だから、明日の晩人知れずこの藥を飲むことであつ

た。すると婚禮の朝には死人の姿になつてゐるから、結婚どころではなく、葬式の用意といふことになる。葬式は、土地の習慣として、晴着のまま、覆ひなしの棺で、先祖代々の墓地へ運び込まれる筈である。この間に、ローレンスがマンチュアに在るロミオへ使を走らせ、ジュリエットが目を覚ます頃には、ロミオと無事に相抱いて驅落をすることが出来るといふのであつた。

ジュリエットはその不思議な薬を押し戴いて庵室を出て行つた。然しその薬をいよく嚙むとなると、彼女も迷はざるを得なかつた。薬の利目がなければ、その時こそ懐劍がある。が、もしこの薬が人の命を奪ふ毒薬であつたらどうしよう！ローレンス上人を信ずる心は、かゝる疑惑を打消しはしたが、今度は目を覺した時のことをいろ／＼に想像して、氣も狂はむばかりであつた。然し、彼女は遂に瓶を取上げ、「おゝロミオさま！あなた

たのためにこれを飲みます！」と呟いて一息に飲み干してしまつた。

翌朝になると、若いパリスは勿論、キャピュレット老夫妻の嘆き悲しみは言ふまでもない。婚禮の諸道具は葬式の調度と變り、祝言の宴は哀悼の餐と化し、祝歌は挽歌に、花嫁の道に敷かれる筈であつた花は、今や死骸を埋めるために降りかけられた。

凶い噂は傳はり易いもので、ローレンスから使者の來ないうちに、この變事はロミオの耳に傳つた。もう到底駄目だと思つたロミオは、今宵すぐにエローナに歸り、墓に横はる戀人の跡を追はうと心を決め、みすばらしい藥劑師の店を尋ねて、毒薬を賣つて貰ひ、遁ぐるが如くマンチュアの地を出立した。

眞夜中にエローナに着いて、キャピュレット家先祖代々の墓地のあるところまで來ると、ロミオは、わが新妻たらむとして死んだジュリエットの墓前に來て、花を播いて嘆いて居る

パリスに見付けられた。パリスはロミオが、死骸を辱しめに來たものと思ひ、そこに格闘が生じて、遂にロミオはパリスを仆してしまふ。ロミオは急いでジュリエットの横はつてゐるところへ走り寄つた。見ると彼女の身體は動かなくなつてはゐるが、美しさは少しも變らず、唇や頬には今にも紅が潮して來さうであつた。ロミオは彼女の身體を抱き締め、最後のキスを與へて、直ちに恐ろしい毒藥を飲み、ジュリエットの上へ伏し重つて倒れた。ところが、間もなくジュリエットは正氣に復した。

ローレンスは、マンチュアに送つた手紙がロミオニ届かなかつたことを知つたので、約束の時間は來たし、ジュリエットの眠りを覺してやらうと墓地へ急いで來たが、この有様を見て、自分の考へてゐた以上に、抵抗し難い大偉力の存在するを知つて驚き、人々の立ち騒ぐ聲を聞いて走り去つてしまつた。

自身の身體の上に倒れかゝつてゐるロミオを見、その手に握られてゐる毒杯を見たジュリエットは、戀人の愛情と節操とに嬉しく感謝し、命を棄て、兩人の誓を完了しようとした。杯のうちには一滴の毒も残つてはゐなかつた。が、戀人の唇には毒藥が残つてゐるであらうと信じて、彼女はまだ温いその唇にキスした。その時急に人の氣はひがしたので、彼女はロミオの腰の短劍を抜き取り、自らその胸に力一ぱい突き立てた。墓守が來た。パリスの従者が、主人とロミオとの決闘を觸れ廻つたので、噂は忽ち町中に廣がつた。キャピュレット公とモンタギュー公も、領主と共に馳せ參じた。墓守に捕へられたローレンスの自白と、ロミオとパリスとの決闘を見た従者と、ロミオが父へ書いた遺書によつて一切は分明した。

領主は兩家の主人の不和確執の理不盡を説き、兩家には神罰が下つたのだと言つた。か

くて、兩家は長い争闘を水に流し、ロミオとジュリエットとの像をお互ひに建てることを約して久しきに亙つた兩家の確執は除かれた。而もその融和は既に遅過ぎたものであつた。

「ロミオとジュリエット」の價値

「ロミオとジュリエット」の構想は、戀愛と憎惡との交錯、戀愛の一時的勝利、二家族の傳統的確執、戀人達の別離と死等より成つて居るが、かゝる構想は、過去に於ても屢々文藝作品に繰返して用ひられたものである。然しシェークスピアは、この組材を以て、彼特有の詩の力と作劇の技巧とにより、古今稀に見る力強い悲劇を創作したのである。

第一場に於ける争闘の場面、ロミオの戀の苦悶、舞踏會に於ける戀人同士の會合、バルコニーのラヴ・シトン、タイポルトとの決闘の場面等、この戯曲がいかにも手際よく組立て

られてあることは、一度緋いた者には直ちに首肯出来るところであらう。

シェークスピアがこの戯曲に用ひた舞臺技巧は、當時流行の流血悲劇の手法を離れてゐる。當意即妙の問答の連鎖、舞踏會の華かな場面、戀人同志の離合の微妙さ等、彼の作中でもこれ程に劇的に効果の著しい脚本は少ないのである。性格描寫の點に於ても、喜劇的性格の乳母や、機智に富むマーキュシオ、理想化された女性のジュリエット等、シェークスピアの天分が遺憾なく發揮されてゐる。

「十四行詩」に表れたる戀愛觀

詩は小説や脚本よりも、作者の思想感情が遙かに端的に表れるものであるから、シェークスピアの「十四行詩」に散見する戀愛の斷想は、彼の肺腑から湧き出でたまゝの感情の

吐露と見ることが出来よう。

戀愛に關するシェークスピアの見解に就ては前に述べたが、その中に言及したところの戀愛に對する彼の標準的見解（ハルジゆんてまけんかい）が簡明に歌つてある詩節を左に擧げる。

愛戀は雨後の太陽のごとく快し、

淫慾は晴れにつよく嵐のごとくうとまし。

愛戀のやさしき春は常に爽かなれど、

淫慾の冬は夏半ばにして夙くも來る。

愛戀は過食することなきも、淫慾は大食に斃る。

愛戀はすべて眞實（まこと）なれど、淫慾は虚偽に充つ。

シェークスピアが、戀愛を以て永久につよくべきものであるとした信念は、幾多の脚本に見出すところであるが、彼の「十四行詩」にも變ることなき愛を頌へた作がある。

眞（まこと）もつ心と心、相契るを

などてわれ妨げむや、

愛は、變る時來れば變り、

去る時來れば去るものならじ。

愛こそは、とこしへの目じるしなれ、

嵐（あらし）に遇うて揺ぐこともなく、

さすらひの小舟に位置は知るゝとも、
そが價值こそ測られぬ空の星なれ。
愛は「時」に弄ばれじ、たとひ「時」が、
曲れる利鎌を揮ふことあるも、
短かき月日に變るものかは、
天地の涯の涯までつゞくべし。
このこと嘘と分らばわれは書かじ。
われまた人を愛さざるべし。

ゲ ー テ

その生立

ドイツの浪漫主義を代表する二大文豪はゲーテとシルレルである。「スツルム・ウント・ドランク」(あらし時代)の思潮を背景として十八世紀末を支配したドイツの浪漫主義は、イギリス及びフランスに起つた十九世紀初頭の浪漫主義に先驅したものと云つてよいであらう。

ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテは、一千七百四十九年、フランクフルトに生れた。父はその地の裁判官であつた。家庭は裕福であつたので、彼は幼年時代から物質的に恵まれて育つた。長じてライプチヒ大學に學び、法律の學を修めて學位を得た。併し乍ら、彼の天

性は文學に適してゐたので、レッシングの諸作を読み、シェークスピアの戯曲を研究するに及んで、遂に全く法律を棄て創作に身を委ねるに至つた。

「若きエルテルの悲しみ」

ゲーテの處女作は、一千七百七十三年に發表した「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」であるが、翌年公にした「若きエルテルの悲しみ」によつて、彼は突然一世の重望を擔ひ、劃時代的作家と見做さるゝに至つた。一千七百七十六年、ワイマールの公爵に聘せられ、その賓客と成り、更に公爵の推挽によつて、時の皇帝ヨゼフ二世から貴族の列に加へられた。

「若きエルテルの悲しみ」は、前後二篇に分れ、全部書簡より成る小説で、作中の人物は

エルテルと、アルベルトとその妻ロッテ、及びエルテルの友キルヘルムの四人である。

その荒筋を語らう――

エルテルといふ多情多感の一青年が、ある年の晩春、アルベルトの許嫁なるロッテといふ少女と相知る。屢々訪れて相見るうちに、エルテルはこの乙女に思ひを寄せてしまふ。乙女はやがて嫁いで行くべき青年があつたのだから、この戀はたゞ片思ひと終る運命を有つてゐた。親友のキルヘルムは、エルテルに過ちがあつてはならぬと思つて、ロッテを思ひ切るやうに説き勧めたが、エルテルはいツかな聽き入れようとしなかつた。

エルテルの思ひは募り行くばかり、遂にその充たされないことを痛感するにつれ、彼は世を果敢み、自殺をすら思ふやうになる。

そのうちにエルテルは、仕官して公使館の書記官となり、日夕公務に忙殺され、さしも

烈しかつた戀情もいくらか落着くやうになつたが、書記官といふやうな激職は、多感にして放恣な性情のエルテルと相容るゝ筈もなく、就職して半年も経たずに、彼は自ら職を辭してしまつた。

一方、許嫁いひなかけのあひだであつたアルベルトとロツテとは、その翌年二月、いよく合歡の式を擧げた。しかるに、アルベルトは仕事に對して極めて忠實であつただけに、家庭的にはやゝ冷淡なところがあり、ロツテは心中いさゝか不満を抱くやうになつた。

ロツテの氣持を知り得たエルテルは、その心にいたく同情を寄せ、前にも増して彼女を戀ひ慕ふやうになつた。と同時に、この際戀を打明けたならば、ロツテが應じてくれはしないかとも思つた。然し、貞淑ていしゆくな女であるロツテは、エルテルの同情は感謝して受けながら、彼との親密さを深めるやうなことはなかつたで、エルテルはいよゝゝ惱ましい思ひを抱くのであつた。

ある夜エルテルは、ロツテを訪れ、彼女がたゞ一人なのを幸ひと、思ひの底を打明けてだしぬけに彼女を抱き寄せてキスしてしまつた。ロツテは彼の不躰を憤り、奥の間へ立ち去つた。かくてエルテルは益々憂鬱いゆううつに厭世的えんせいてきになつて、遂に自殺を遂げてしまふのである。

作の主題と價值

この作の主題は、作者ゲーテの空想から生れたものではなかつた。史家の傳ふところによれば、エルテルは作者自身の過去の姿であつた。ゲーテが曾てエッラールの高等法院に法律の研究なしてゐた頃、公使官こうしくわんの書記官しよきくわんケストネルの許嫁シャロツテに戀して、失戀の

結果自殺しようとしたことがあり、又その頃、ゲーテの友人エルサレムといふ男は、知人の妻に失戀して自殺したといふ事實もあつた。ゲーテはこの二者の事實を「若きエルテルの悲しみ」の中に取り入れたものである。

この作は、當時のドイツばかりでなく、全ヨーロッパに廣く愛讀せられ、主人公の情熱に感激したあまり、その運命に範を求めて自殺した青年もあつた。

主人公エルテルが、その戀に悶え、世を果敢み、生か死かの苦惱を味ふ一篇の情趣といひ、行文の優麗暢達な筆致といひ、青年作家としての彼がこの創作は、近代文學中の屈指の玉篇である。

厭世觀から人道主義へ

ゲーテは、一千七百六十七年、夙くから希望してゐたイタリアの地に旅行した。この旅は、ゲーテの思想に大なる影響を與へたものである。「若きエルテルの悲しみ」では、この世を苦の娑婆と觀じ、厭離穢土の觀念が強くと、作者自身も、主人公と同じく一種の厭世主義者、憂鬱病者らしい面影を忍ばせたが、かの南歐の明媚な自然と雄渾濃麗な古美術に親炙した結果、彼は古代希臘の理想を讚美するに至り、人道主義を唱道するやうになつた。

其後の彼の作品には、この思想上の變化がよく表れてゐる。一千七百八十七年に出た「イフィゲニエ」、翌年發表された「エグモント」、一千七百九十年に出版された「トルクアト・タリオ」等の戯曲にも、「ヘルマンとドロテヤ」なる叙事詩にも、「キルヘルム・マイステル修養時代」「親和力」等、其後に發表された小説にも、この思想上の轉回を見ることが出来る。

不滅の名大作「ファウスト」

彼が描くところ謡ふところ、皆藝術家としての彼の天稟の偉大さを示さぬものはないが、彼をして古今東西を通じての屈指の大藝術家たることを確定した作品は、かの大戯曲「ファウスト」である。この作は青年時代の腹案に基いて筆を起し、一千八百三十一年、八十二歳で彼がこの世を去る時に、漸く完成を見たのである。

全篇は二部より成り、それに三つの前口上が附いてゐる。通計一萬二千百十一行を算する一大劇詩である。第一部は二十四場で、一貫した筋を有し、第二部は五幕に分たれ、各幕連絡なく、一幕毎に獨立してゐる。藝術的見地からして、第一部が第二部に優つてゐることは、何人にも首肯し得るところであらう。

「ファウスト」の梗概

三つの前口上のうち、「天風序曲」は、この作の根本思想を説明するものである。悪魔×ファストフェレスが、善人の老學究ファウストを墮落させようといふと、神は、人が努めてゐる間は迷ふに極つたものだから迷はずことが出来るけれど、善い人間ならば、よし暗黒な内の促しに動かされてゐても、絶えず正しい道を忘れないもの故、結局悪魔の力で善人を墮落させることは不可能だと悪魔の言を斥ける。そこで神と悪魔とが賭をする。地上のファウストは無論この賭のことを知らずにゐる。

ファウストは、いろ／＼のことを研究したが、一つとして自らの心の満足を得ることは出来ない。

「はてさて、己は哲學も、

法學も醫學も、

あらずもがなの神學も、

熱心に勉強して、底の底まで研究した。

さうして己はこゝにかうしてゐる。

氣の毒な、馬鹿な己だな。

その癖、なんにもしなかつた昔よりも、

ちツともえらくはなつてゐない。

彼はかう述懐した。そしてさまざまに思ひ迷つた。

一體この世界の奥の奥で、統べてゐるのは何か。それが知りたい。そこで働いてゐる

一切の力、一切の種子は何か、それが見たい。

かうつきつめて考へた結果、彼は魔術を學んで世の中を自由に動かし、この世をおのが心のまゝに弄ばうとして、魔術書を繙いて呪文を唱へた。すると地靈が、おそろしい姿で現れる。あまりの恐ろしさにファウストは魂を失ふ。彼は自ら魔法を修めようとして、それすら叶はないわが身の不甲斐なさを歎いて、毒を仰いて死なうとする。と、折しも復活祭の日とて、「キリストはよみかへりたまへり」と戸外で天使たちの聲が聞えるので、彼は幼年時代を想ひ起して、辛うじて死を思ひ止まる。それほどまで、彼は懷疑し、懊惱したのである。

ファウストが弟子を連れて街上を散歩してゐると、悪魔メフィストフェレスは黒い老犬となつて彼の後に従ひ、彼の家に至り、やがて本體を現はし、ファウストを誘惑しようとする

る。ファウストは、「己を甘い詞で騙して、己に自惚の心を起させ、己を快樂で賺すことが君に出来たら、それが己の最後の日だ。賭をしよう、」と言ふ。

そこで悪魔は、先づファウストを「ライブチヒなるアウエルバッハの窖」へ案内する。

そこでは學生たちが酒を飲んで、面白さうに騒ぎ狂つてゐる。が、ファウストはたゞ不愉快な感情を起すだけであつた。で、悪魔は、彼を官能の快樂（ふんりやく）に誘うて、痴漢にするに限ると考へ、次に「魔女の厨」へとつれて行く。魔女に若返りの薬を飲まされ、忽ち青年に立かへり、眠つてゐた青春の情熱が呼び覺される。さうした上で、彼は純潔な町娘マガレーテに會ふことになる。こゝにファウスト劇中の名高い場面、グレーチエン（マーガレーテの愛稱）の悲劇（ひげき）が始まる。

ファウストは可憐な乙女グレーチエンを見て忽ち戀の炎を燃し、悪魔の取持で乙女を手

に入れる。が、これは土地の習俗にも教育の規則にも違反した關係であつた。ある日グレーチエンは、ファウストと媾成（おひびき）をするために、ファウストから貰つた麻酔薬を母に飲ませる。ところが、その薬はメフィストの作つた毒薬であつた。かくて乙女は、思はずも母殺しの大罪を犯してしまふ。彼女の兄なるヴレンチンは、偶まグレーチエンを呼び出して來たファウストと悪魔とを相手に決闘をしたが、力及ばずして敵刃に斃れてしまふ。で、殺人の罪を犯したファウストは、その町を逐電しなければならなくなつた。が、後に残されたグレーチエンは既に懷妊（ふたごん）してゐた。思ひ餘つて心狂つた彼女は、生み落したわが子を水に投じて殺した。そこで彼女は獄舎に繋がれ、今や處刑の日を待つのみ身となつた。

グレーチエンとファウストを引離したのは一にメフィストの計略で、悪魔は一方グレーチエンをいよく深い懊惱の淵に沈めようと心組み、他方ファウストが良心に目覺めよう

とするのを更に誘惑して、ハルワ山中のワルブルギスの夜宮に導き、酒池肉林の快樂に感溺させ、最初の賭の勝利を獲得しようといふのであつた。然しファウストは、グレーチェンを忘れることは出来ない。彼女の下獄と處刑とを聞かされて、彼女を救ひ出さうと戻つて来る。が、グレーチェンは、せめて自分の罪を地上で償ふために潔くこゝで處刑を受けねばならないと言ひ張り、ファウストの提言を拒み、神の審きの前に身を投じた。と、この時天に聲あつて、「救ひだ！」といふ。ファウストはメフィストに促されてその場を去る。同時に牢獄の奥の方から「ハイインリヒさん！」といふ可憐な消え去るやうに叫び聲がする。蓋しこの叫びこそ、この純いグレーチェンの魂の犠牲が、後になつてファウストの救済のために役立つことを暗示したものである。第一部はこゝに終る。

第二部の始に於て、今や次第にメフィストの影響を免れつゝあるファウストが、痛切な良

心の苛責に惱んだ後、草花咲き亂れた野に横はり疲れ果て、眠りを求めてゐる。

聖き者にせよ、悪しき者にせよ、幸なき人を哀れと見るエルフの群によつて、彼が胸の怖ろしい闘ひは鎮められ、身を焼き盡すやうな痛い非難の矢も抜き取られ、苦しい恐怖を抱いた胸も淨められる。かうして眼を覺したファウストは生命の脈搏が再び新しく活潑に打つのを覺える。

そこでメフィストは、第一部に於けるやうに「小世界」でなしに、新たに「大世界」へファウストを導いて行く。先づ現世の榮光と名譽とによつて、彼に満足を與へようとし、ファウストを皇帝の宮廷へ連れて行く。宮廷は今や非常に疲弊してゐたので、それを救ふために幽靈紙幣を發行することになる。愉快な假面舞踏會にファウストは當の神となつてまぎれ込んで行く。幽靈紙幣によつて國の疲弊は救はれた。そこで帝は、益々愉快的な悅樂

を求めらるやうになり、男と女の模範をはつきり見せよ、ヘレネとパリスとを目の前の前に出して見せよとせがむ。ファウストは既に宮廷生活にも飽きてゐたので、何か變つたことをして見たくなつて居た。そこでメフィストにこの事を聞いたが、さすがの悪魔もそれは出来兼ねた。然し彼はファウストに、「手段はあるにはあるのです、」と言つて、あらゆるものゝ原型げんけいを造り出す女達の國へ行く鍵をファウストに手渡す。で、ファウストは單身その「母の國」へ行つて、パリスとヘレネの原型を呼び出した。ところがファウストは、ヘレネの高雅な美に打たれて、彼女の手に觸れてしまふ。すると忽ち爆發が起る。ファウストは地上に倒れる。男女の鬼共は霧となつて消散する。メフィストはファウストを肩に昇いで、宮廷きやうていから彼の元の家へと戻つて來る。

第二幕では、ファウストが家出してからそのまゝになつてゐた舊宅に、弟子のワグネル

が今や大學者となつて、獸的じゆうてき手段しゅげんによらずして人間を生み出すことを研究してゐる。メフィストの助力もあつて、その研究は完成し、試験管の中に小人が出来上る。このものは不思議な神通力を有つてゐて、人の思想を眼で見ると知ることが出来る。

舊宅に運ばれて寢臺の上に臥せられても、まだ眼の覺めないファウストが、ギリシヤの古典世界に思ひを漂はしてゐることを知ると、小人はファウストとメフィストとをギリシヤのファルサロスの野に運んで行く。こゝは暗闇で、今宛度「ワルプギスの夜宮」で神語中の神々が打興じてゐる。ファウストは地に足がつくと眼が覺めた。あまねくヘレネを探し廻るが、どうしても彼女を見出すことは出来ない。そこでオリンポス山の空洞に下つて、幽界いゆうかいの後ごヘルゼフ、ネイヤにヘレネを引渡して貰ひに行くことゝなる。

第三幕、スバルタなるメネラスの宮殿の前で、ヘレネは捕はれたトロヤの女達と共に、

出て来る。ヘレネは、トロヤ征服の軍に、夫に従つて赴いたのであるが、一先づ引上げて来たところである。そこへメフィストが醜いフォルキアスの姿となつて現れる。そしてメネラスが、彼女を生贄として神前に捧げると言つてゐることを告げる。ヘレネは、死を怖れるわけではないが、ジュピタアの娘ともあらうものが、獸のやうな死に方はしたくないと思ふ。そこで何れへか遁れようと求める。メフィストは、北方の山間に城を構へてゐる外國の王の許にヘレネや侍女共を落ちさせることにする。その王こそファウストである。そこでファウストとヘレネとの結婚が行はれる。これ即ち浪漫主義と古典主義、中世と古代との結合を象徴したものである。二人のあひだに一子オイフィリオンが生れる。やがてこれが成長して青年となるが、あまりに不羈奔放な生命の飛躍を試みたために夭折する。こゝにバイロンを諷した意思を見る。ヘレネは死んだわが子を追うて下界に下つて行く。

自分の幸福を未だに自覺してゐないファウストは、今やたゞ一人となる。さうして雲と化したヘレネの衣裳に乗せられて、北の郷里へ歸つて行く。

第四幕目、ファウストは古代ギリシヤ精神の洗禮を受けたので、其後は審美的、藝術的方面の努力に一身を委ねさうなものであるが、彼はさうはしなかつた。ギリシヤ精神に、彼は英雄的な精神を見出して、そこに健全な人間の力を感じた。今や彼は、あらゆる個人的欲求を棄て、他人の幸福のために不斷の活動をなし、そこに満足を見出さうとするに至つた。かくしてファウストは益々メフィストから遠ざかつて行くことになつた。而もメフィストは、やはりファウストを助けて行かなければならぬのであつた。

曩にファウストやメフィストの案によつて、幽霊紙幣で國の疲弊を一時救ひ得た例の皇帝は、その後幽霊紙幣が禍して、却つて國勢が衰微し、僭帝の反逆に遭つて困難したが、や

がてメフィストの力によつて僭帝を征服することが出来た。その禮として、帝はファウストに荒寥たる一地方を與へた。こゝにファウストは、幾多の勇敢な人傑を集めて、立派な國を建設するに至る。

第五幕では、ファウストは再び白髮の老爺となつてゐる。彼は既に多くの偉大なる事業を完成した。海邊の低地を干して立派な國土を造り上げた。船舶を遠近に派遣してゐる。彼の意志は強くも發揮された。然し、其偉業のあひだには、幾多の不正が行はれた、その不正は主にメフィストが關與してゐる。要するに、彼の生涯はあまりにも自己満足に終止してゐたので、ファウストは人から愛敬されずに畏怖されるやうになつた。

然るにこゝに、フィモン、バウチスの老夫妻がある。かれ等はファウストと全く反對の立場にある。ファウストは威力を以て二人を別の地へ移り住ませようとする。然し彼の偉

力を以てしても二人の意志を曲げることは出来なかつた。二人は遂に非業の死に就くことになる。かうなるとファウストはメフィストの殘酷を憎み、自分の矛盾を認めざるを得なくなる。そこで彼はメフィストから離れなければならぬと考へる。それはつまり、魔術を去つて自然に直面することだ。灰色の女「憂ひ」が彼に近付く。その吹く息によつて、ファウストは失明する。然し心の中に明るい火が輝いてゐる。彼はメフィストに命じて溝渠を掘らせる。メフィストは死靈を督して溝渠の代りにファウストの墓穴を掘る。かくて彼はその満足に到達する前に一生を終ることになる。

己のこの世に残す痕は

却を経ても滅びはすまい、

さういふ大きい幸福を豫想して

今己は最高の刹那を味ふのだ。

かう言つてファウストは倒れる。メフィストが勝利を得たのではない。ファウストは自らの努力に依つて、最高の刹那を味ふことが出来たのである。かくて天使等は怒り狂ふ悪魔からファウストの靈を奪ひ、天國に運んで行く。ここでは、グレーチンが慈しか深い神の愛の許にあつて、ファウストの贖罪の禱を捧げてゐるのであつた。これで第二部が終つてゐる。

「ファウスト」に現れたる思想と作の眞價

「ファウスト」一篇が、いかに大きな規模と、いかに複雑な筋とを有つてゐるかは、上述の梗概を讀んでも明瞭であらう。古くはホーマアの「イリヤッド」ダンテの「神曲」、近世で

はシェークスピアの「ハムレット」と相並んで、世界文學寶典の一つに數へられてゐる。

シェークスピアの「ハムレット」の主人公、デンマーク王子ハムレットが、決してデンマークの王子たるを要せず、かの性格、かの生活、かの悲哀が、描かれたる環境に於ける全世界の青年のそれらを代表するものであるやうに、「ファウスト」の中の主人公ファウストも、その性格、その生活を、あらゆる世界人と共通するものであり、その悲哀その歡喜をあらゆる人類と相類つものである。即ち、この一篇は人道的精神の到達、人間味の發揚、人生の轉變を悉く含有する作品と見ることが出来る。従つて不可抗的な興味と、無限の變化の魅力とを以て凡ての人士に訴へるものである。機智、哀愁、叡智、滑稽、神秘、尊敬、懷疑、魔力、皮肉等の、あらゆる要素がその中に見出される。眞に人生の悩みを味はむとする者、人生の嚴肅なる謎を解かむとする者は、この詩に依つてこれを求むることが出来よ

う。言ひ換へれば、「ファウスト」の一篇に、我等は鏡に映し見る如く、我々の知識的存在の永久の問題を見るのである。

イタリーの美學者クロチエに言はしむれば、ゲーテは生活に於ける藝術家であつたから、我々に如何に生くべきかを教へたのだ。而も彼の教は、理想を提供し、箴言を提供する道徳家のそれではない。彼は自らの直接の生活によつて我々を教へる。たゞ、彼の書き記す観察と主張とが、自ら學理的綱要を形作つてゐるのである。また彼は、特殊の技術的方法によつて我々の生活を導きはしない、たゞ、さうしようと思へば彼の能力はその方面にも十二分であつただけである。彼が何よりも第一に我々に教へるのは、精隨的な人生の姿に於ける人間の生活である。彼は自身の生活上のさまざまの例によつて、一般的な諸問題、即ち錯交する世界の諸問題、一個人の狭い周圍に起る諸問題、不變に關する問題、變化に關する問題、情慾、意志、實行、學理に就ての問題等を我々に提供し、それが解決を教へたのである。

ツルゲニエフ

その生立

ツルゲニエフは、一千八百十八年、ロシア舊都モスコウの南なる、オリヨオルといふ町に生れた。彼は富裕な貴族の子として生長した。ペテルブルグ大學から、ベルリン大學に移り、言語學や哲學を修めた。

一千八百四十五年、「バラシヤ」といふ詩を公にして讀書界に認められ、更に二年の後、「コールとカリニッチ」なる短篇を發表して世の耳目を聳動せしめた。この短篇こそ、かの有名な短篇集「獵人日記」の巻を飾つたものである。

一千八百五十五年以後、ツルゲニエフはフランスの首都パリに滯留してゐた。彼が死ん

だのも、パリの近郊なる、親友の別荘に於てであつた。

彼の後半生が殆どパリであつたために、この地の文學者は大抵彼の友人となつた。フロオベール、ゾラ、ドオデエ、ゴンクール兄弟等、皆親しく交つた。

ロシアの國民性とその文學

ツルゲニエフの藝術を論ずる前に、ロシアの國民性を一瞥し、それと文學との關係を簡説することが必要であらう。

ロシア人は、一面、世界有数の壓制主義者であるが、また一面、極めて進んだ自由主義者である。また一方には、自らを殺して宗派の信條に殉ずるほどの盲目的な正教徒であるが、また他方では、刺殺を擅にし、爆彈を投じて破壊を敢てする虚無主義者である。彼等



は信心にも、不信仰にも、愛にも憎みにも、服従にも、反抗にも、すべてに於て極端派である。極端であるが故に深刻でもある。従つてロシア文學は、自ら深刻な味ひに富むものが多い譯である。神と悪魔、個人と人類、又は社會といふやうな、相反した二面が、互ひに劇しく争ふ姿を見るのである。

トルストイといひ、ドストエフスキイといひ、アルチバシエフといひ、ゴーリキイといひ、皆この特質を有つた作品を數多く出してゐる。そのあひだにあつて、ツルゲニエフには、やゝ静かな、なごやかな悲哀の流を見出すのである。

ツルゲニエフの作品

彼の處女作は、前に挙げた「獵人日記」であるが、彼にはその六大作といはれる長篇が

ある。「ルウヂン」「貴族の家」「その前夜」「處女地」「父と子」「煙」の六種である。

それらの作品は、いづれもその時代々々の人物を描いた點に特殊の興味がある。例へば「ルヂーン」は一千八百四十年から五十年までのロシア闇黒時代、「貴族の家」はそれから少し後れたいはゆる愛露主義時代、「父と子」はいはゆる虚無主義時代の人物、及びその環境を描いたものである。

ツルゲニエフを、新浪漫主義者の作家と見る評家もあるが、それは必ずしも當つた見解ではない。彼には寫實派らしい一面と、理想主義らしい一面とがある。然し彼が人生の暗黒醜惡なる方面を可及的に避けて、明るい美しい清い方面を選んで描いた點や、靜かな悲哀、ほのかな神秘を愛好した點を見れば、新しい浪漫主義の傾向を先驅したと言つても過言でないであらう。

彼の描いた「父と子」中のバザロフは、思想界の混亂時代、新舊時代の衝突時代を代表した人物で、あらゆる社會の習慣や宗教の規則に反抗し、個人の覺醒を叫んだ矯激な人物で、この一篇が虚無主義きよむしゆぎの解説とも見られるものである。

彼の作には、幻想的で恐ろしい、理想では到底規定出来ない神秘が、人間の神經のうちに生きてゐることを認め、その力が表現せられてゐる。

彼は光明を愛し、美を重んじ、暗黒を嫌ひ、醜を忌み、不調和を卑しんだが故に、單なる自然派の作家たるに終らず、新浪漫主義の先驅者となり、一面理想主義者、虚無主義者の色彩しきさいを帯びたのである。

「彼の詩想は、秋や冬の夜ではない、春の夜である。而も晩春である。爛漫と咲き亂れた花が散り初めようといふところだ。遠く霞んだ中空に、おぼろの月が照る夜、櫻の並木路

をそゞろ行く趣がある。約言すれば艶麗のうちどこか寂しいところがあるところが、即ちツルゲニエフの詩想である」と言つた長谷川二葉亭の批評は面白いものである。

最も美しい人間の感情、それは戀愛である。彼は、永遠に純かるべき戀愛を取扱つて、多くの小説や詩を書いた。自然な、近代きんだい的な戀愛れんあいを、あらゆる形に於て表現しようとした。然し、彼の描いた範圍は、ひとり質に於てのみでなく、廣さに於いても限があつた。

彼の取扱つた人物を分けて見ると、一が農奴、二が知識階級で無職の人、三が婦人である。彼の大作は、その中でも第二のインテリゲンツィヤを主として取扱つてゐる。この階級は、當時のロシアの中心をなすもので、新思想しんしきうの醞釀はちかうをなしつゝあつた階級であつたからである。「ルーヂン」「貴族の家」「その前夜」「煙」等の作品は、すべてこの階級を精察描破したものと云へるのである。

「ルーチン」の梗概

主人公ルーチンは三十四五歳の男、ある時、ダーリヤ・ミハイロウナ・ラスンスカヤといふ金持の未亡人の女地主のところへ晩餐會に招かれて行く。そこで彼は集つた人々に向つて、巧みに自然の必要とか、犠牲とか、人間の事業の不滅とかいふことを説く。言葉は巧みで、何か神々しいものが當人に乗移つて、物を言はせてゐるやうであつた。

それからルーチンは、この家に引き留められ、二ヶ月も寄食する。そのあひだ彼は、常に高尚な理想と高遠の事業とを口にしつゝ、未亡人のダーリヤから彼でなければ夜も日も明けないといふほどの信用を博する。この娘の崇拜はつひに彼に對する戀となる。彼もまたこの娘に戀して、しきりに情熱ありげなことを口にする。ある時戀愛の問題を語りなが

ら、彼は彼女に向つて、「櫛の木は堅い木です——櫛の葉は若いのが芽を出す時分までは、古いのが落ちないです」といふ。娘はこの言葉から、ルーチンが自分の事業のため、自分の理想のためにも、なほ戀愛を捨てられずにあることを確めて、つひに身を犠牲にして彼を救ふべく、結婚の決心をする。母はこの決心を聞いて驚き、それを翻させようとする。娘はつひに意を決して、彼と共にこの地を去らうとし、彼を森に誘ひ出して、其の決心を迫る。この時の態度はルーチンの性格を最もよく現はしてゐる。

「ルーチンさん、わたしは一寸脱けて來たのですから、永くはゐられませんから、搔摘^{かひつま}んで申しますが、もう母は何もかも存じてゐますわ。」

「ちよッ！ しまつた！ で母さまは何とおつしやるのです？」

「別段憤つて居りませんが、唯輕卒だつて叱言を申します。」

「たゞそれ切りですか？」

「あなたに娶らせる位なら、死んで呉れた方がよいと申しました。」

「え、そんなことを？……それであなたはと言はれたのです？」

「わたし？ それよかあなたはこれからどうなさるつもりですか？」

「どうも情ないことになつたなア！ 親しくなつたばかりなのに！ かうならうとは思ひがけなかつた！ ぢや、なんですか、お母さまはひどく御立腹おはらだちですか？」

「はア……どうも、もうあなたのお噂を聞くのも厭だと申して……」

「そりやひどい！ それぢやもの到底望みはありませんね。」

「とても。」

「何の因果いんぐわでこんな思ひをするのだ！ 私はもう眼が眩んで、無茶苦茶になつて来た……」

情けないと思ふより他何も思つてゐられはしない……あなたはどうしてそんなに落着いてゐられるかと、不思議に思はれる！」

「わたしが平氣だと思ひなの？」

「お母さまは色々お訊きになつたんでせうね？」

「それはね……あの、わたしほんとにあなたを思つてゐるかつて。」

「で——あなたは？」

「隠したつて仕様がなから、言つてしまいました。」

「實にあなたは潔白けつぱくだ！ 婦人の心といふものは、實に玉の様だ！ それでお母さまは結婚はならんときつぱり仰つたのですね？」

「え、きつぱり。それといふのも、あなたには結婚なさる氣なんか無いと思ひ込んでゐる

ものですから。」

「では私が、あなたを欺だましたんだと思つておいでなんですね！ 實に情けない！」

「そんなことを仰つてゐて、は無駄に時が経つてしまふばかりです。わたしは愚痴をこぼしたり、泣いたりしに參つたのではありません！ わたしは御相談に參つたのですよ。」

「相談といふと？」

「あなたは男でいらつしやるから、わたし何でもあなたのおつしやる通りになりますわ、死んでもお言葉に背そむかないつもり。ですから、あなたはこれからどうなさるお考か、おつしやつて下さい。」

「どうするといふのですか？ で、勿論私はもうお宅にはゐられなくなるのでせうな？」

「それはさうかも知れませんが。でもわたしの伺つたこと、あなたは何もおつしやらないの

ですもの。」

「伺つたことツて？」

「これからどうなさるお考か……」

「諦あきらめてしまふより他に仕様がないうちやありませんか。」

「諦めて？」

ナタリーヤの唇の色はの眞蒼まっさかになつてしまつた。

ルーヂンはそこで、諦めなければならぬ理由をくどくどと説明する。ナタータリヤは「あなたは口癖のやうに、犠牲々々とおつしやるけど、それなら何故、俺はお前を愛するが結婚は出来ない、これから先如何なるか請合ふことは出来ないが、一所に來るなら來いと、何故なぜおつしやらないのです？ さうおつしやれば、何處へでも參ります、どんなこと

でも致します。口で立派なことをおつしやつても、行ひでなさらなければ何の益にも立ちませんわ。」

かう言ひながら、ナータリヤはルーデンの止めるのを振り切つて走り去つてしまふ。彼は、始めて自分の戀の、心の奥から出たものでないことを知り、同時に自分が何事にも全身全力を打ち込み得ない性質であることを知つて、われとわが身を責めた手紙を置いて飄然と去る。

その手紙の一節に、

「私は實に天分薄い人間です。……私は力相應のことは何をなし得ず、果つべき者だと思ひます。少しは天分があつても何の役にも立たず、種を蒔いても何も生えますまい。私には、人の心を動かすべきもの、取分け婦人の思ひを惹くべきものが不足してゐるやうで

す。唯人の智ばかりを領するのは、儂い無益なことです。熱心に身をも心をも打ち込んで見ようと思ひますが、それが叶はないのです。もう私も三十五歳、かうして果敢い戯のやうな一生を送ることになるかと思ふと堪りません。」

また「私は今頼りない孤立の身となりました。私は生來、懶惰に克つことが出来ず、いはゆる事業に精神を打ち込むことも出来ず、かうして物足らぬところあるまゝに一生を終ることです。わづかな故障に遭つても、忽ち氣が阻み、心が挫けてしまふ。將來の事業のために戀を捨てたといふのならまだしもですが、私はたゞ身にかゝり來る責任を懼れたのです。」

この二節を読めば、ルーデンがいかにも意志の弱い、實行力のない、執着力の少ない人間であることがよく分る。

ルーヂンはこの後、顔に皺が寄り、頭に白髪が交るまで、何の定職もなく、町から町へ村から村へとうろつき廻つた。そしていろ／＼な仕事に手を出して見た。然し結局、何一つ仕出來さずじまつた。かくして彼は浮草の如く、あちこちと彷徨し、遂に故國を去りパリに赴き、共和黨きやうわだうの亂が起つた時、義勇軍に投じて死んだのである。

ルーヂンの性格と時代思潮

「ルーヂン」に限らず、いかなる時代の文藝も、常に時代の反映を受けてゐるものである。あらゆる文藝の背後には、必ず時代精神じだいせいしん、又は時代思潮が横つてゐると言つてよい。而してツルゲニエフの傑作「ルーヂン」(浮草)の主人公ルーヂンは、ロシアの一千八百四十年代の最もよい代表者と見ることが出来る。

一千八百四十年代のロシアは、政治上最も暗黒な時代で、ニコラス一世の亂暴な専制主義が一世を支配してゐた。そして若し、この主義に背馳する言動あれば、忽ち其個人其團體は亡びざるを得なかつた。

で、この専制主義せんせいしゆぎに相反する思想を有つてゐる者、又はロシアの現在及び將來に憂慮を抱く者は、到底その抱負を政治界に發揮する望みはなかつた。勢ひ彼等は寂寥と孤獨に囚はれ、自暴自棄の生活をするに至るのであつた。

殊にこの傾向は、國家の將來に種々の夢を抱く青年男子を支配した。かくて彼等は、満々たる不平を湛えながら、結局は政界に望を絶ち、活動の舞臺を捨てた。で、かうなれば彼等の赴くところは、その反對であるところの空想世界くうさうせかいより他になかつた。彼等は哲學を究め、宗教に就き、藝術に没頭した。

かくて彼等は、實行力のない口ばかりの人、歌ばかりの人となつてしまつた。口の先だけではなかく立派なことを言ひ、頭の中ではなかく大きなことを考へてゐたが、實行の手がそれに伴はないといふ、一種の不具者となつてしまつた。その多くは、實生活上の劣敗者で、浮草の如く彷徨し、何一つ完成することなく世を送つてしまつた。ルーデンといふ人物は、この時代のインテリゲンツィヤの代表的な性格を有つてゐたといふことが出来る。

藝術家としてのツルゲニエフ

ツルゲニエフは、眞の詩人たるべき能力、言ひ換へれば、活きた人生を描き出す能力を充分に具へてゐた。然し、かう言つただけでは足りない。彼が大藝術家たる所以は、彼が

讀者をして、その描寫する人物に就て、作者自らの感ずる興味、判斷と描かれた人物から讀者が受ける感銘との調和一致を感じしめたところにある。作中の人物に就ては、作者の感じたところをそのまま讀者に感ぜしめるところにある。

ツルゲニエフの心には、憂鬱といふ深い廣い流があつた。従つて彼の作品にも、隨所にそれが表れてゐる。彼の描寫は寫實派のそれの如く、客觀的に、沒個性的ではあつたが、作品の眞底には、主觀が入り込み、個性の影も濃く印してゐた。

彼の個性は悲哀である、感情にのみ左右されない悲哀である。近代作家にして、彼の如く悲哀に究ちた心の持主はない。ラテン系の人種の悲哀は外面的表皮的であり、北歐人のそれは哀傷的であるが、ツルゲニエフの悲哀はこれらと異り、現實そのものを悲しむ悲哀である、スラヴ人種の弱點を悲しむ憂愁であつた。實に彼の有つ悲哀はスラヴの民謡俚歌

に現れる悲哀と同じく、人種の心情の根底に横はる悲哀であつた。

ブランデスは言つた――

「ゴーゴリの悲哀は絶望より來り、ドストイエフスキイの悲哀は腐敗墮落の徒に對する同情憐憫から來り、トルストイの悲哀はその宗教上の宿命説から來るものである。が、ひとりツルゲニエフは哲學者であつた、――彼は人間を愛した、彼の悲哀はそこから生れた。」

ゾラ

その生立

エミール・ゾラは、一千八百四年四月十日フランスの首都に生れた。夙く父に死別したために、少年時代から世の辛苦を嘗めねばならなかつた。十八歳の時、南フランスに赴いて、マルセイユの一學校に入り、更に翌年パリに戻つてサン・ルイ學院に入つたが、いづれも卒業せず退き、一千八百六十二年、即ち二十二歳の時、パリの出版書肆ハセットに雇はれて、その店員として働いた。多忙な實務たばうじつむの餘暇を創作に向け、短篇小説に筆を染め新聞雜誌に投書を始めたが、これが彼の文學生活の第一歩をなしたのである。

「ルウゴン・マツカール」叢書

ゾラが文學者として聲名を馳せたのは、かの有名な「ルウゴン・マツカール」叢書を書き出した時である。この叢書は實に二十卷から成り、二十年の歳月を費して書き上げたものである。

その卷名を列擧すると、「ルウゴン家の財産」「餌」「パリの腹」「ブラッサンの勝利」「僧ムーレの罪」「ユーゼヌ・ルーゴン閣下」「居酒屋」「ナナ」「戀の一頁」「煮る釜」「婦人の幸福」「生の享樂」「ジェルミナール」「制作」「土地」「夢」「人獸」「金」「敗軍」「バスカル博士」の二十卷である。

これらの作中、始めの數種は世評も左程芳しいものではなかつたが、パリの一職工の酒

亂の生活を骨子として書いた「居酒屋」が出るに及んで、彼は當時の讀書界の注目を集めるに至り、續いて發表した「ナナ」に至つては、五萬以上の初版を一時に賣り盡すといふ盛況であつた。

「ジェルミナール」は、資本家と労働者の衝突、それに起因する同盟罷工の實況、更に職工労働者等の悲惨なる生活を書いたものである。また「制作」は、セザンヌ、マネー等の著名な畫家をモデルとして、美術家の生活を縦横に描いたものである。また「敗軍」は、普佛戰爭を取扱つたもので、戦場の凄惨な情景や、攻圍中のパリ城内の慘鼻の光景を描きそのうちに二人の兵卒の境地を默出した物語である。

「實驗小説」とは何ぞや

ゾラは常にモウパッサンと並び稱せられるが、モウパッサンとは非常に趣を異にしてゐる。モウパッサンが事象の内面に沈潜して行かうとするに對して、ゾラは主として事象の外面描寫に終始した。モウパッサンが厭生家であつたに反して、ゾラは飽くまでも人生の光明を信じた理想家であつた。いづれも自然主義なる名を冠し得る作家であるが、モウパッサンは精神的に至靈的自然主義者と見れば、ゾラは唯物的自然主義であつた。

ゾラは自分の寫實的しゃじつてきせうせつ小説を、「實驗小説」と稱してゐたが、その要旨を彼は次のやうに述べてゐる。

「余は小説を書かうとする時、先づ作中の人物、殊に主人公の性格を明かにすることに心掛ける。而してその性格を寫し出すためには、その人物の氣質と、その生れた家族と、その受けた感化と、その生活してゐる環境くわんきやうとを深く考へ、それからその主人公の接近してゐる

人物の性質や習俗、職業や境遇を研究する。そして、ある旗亭を描かうとするか、ある劇場を描かうとする場合には、余はそれらの場所を實地に踏査觀察する。どんな些事でもそれが生ずるためには、自然的な、必然な徑路のあるといふことを余は固く信じてゐるか、その人物の性格乃至境遇なにしきやうきやうから、どういふ結果が生れるかといふことを余は研究表明しようとするこの點で余は、譬へて見れば、極めて徹小な緒から、遂に大罪を發見する探偵にも似て居るのである。」

この要旨を見ても、いかにゾラが自然主義の闘士たうしとして忠實であつたかを知ることが出来る。

「ルーゴン・マツカール」叢書の全部を語ることは紙面が許さないから、その傑作の随一たる「居酒屋」に就てその内容を紹介することにしよう。

「居酒屋」は二十卷中の第七卷に當るもので、第八篇「ナナ」の序曲となつてゐる。即ちこの作では、次篇の主人公ナナの兩親なるクーボオ夫婦が主人公女主人公となつてゐる。ナナが十五歳になるまでの生立が、この篇で大切な役目を果してゐることも、讀むに従つて明瞭になるであらう。

その梗概

ジェルゼーズは二人の幼兒と共に、夫のランチに捨てられてしまつた。二人の幼兒と、着のみ着のまゝで投げ出されたジェルゼーズは、それでも雄々しく、洗濯婦にして細いな

がら生活をして行つた。頼りない彼女にとつて、唯一人の温い友人は、前から同じ宿屋に住んでゐる若い亞鉛工のクウボウであつた。が、彼はやがて彼女に戀するやうになり、つひに結婚を申し込んだ。彼は眞面目な職人であつた。その上亞鉛工であつた自分の父親が、飲酒癖が強かつたために、遂に仕事中に家根から落ち、敷石で頭を碎いて死んだのをまのあたり見せられた彼は、斷じて酒は飲むまいと決心してゐた。こんな固い頼もしい男であつたから、もう二度と男に接しまいと決心してゐたジェルゼーズも、つひにその申出に應じて、二人は結婚することになつた。

睦じい働き者の夫婦と評判されながら、二人は四年間働いた。夫は賃錢をそつくり持つて歸るし、妻は洗濯屋に通つてゐたのだから、だん／＼蓄へも出来るやうになつた。やがて洗濯屋の前の可成の家に間を借りて移つたが、そこで妻は女の兒を生んだ。子はカウボ

ウの姉の名を取つてナナと命名された。

その新しい家で、ジェルゼーズは同じ建物の中に住んでゐたグージェといふ母子と知合になつた。息子は鐵器工場に働いてゐる鍛冶工であつた。特に彼女はその母人と仲好になつた。そのうちにジェルゼーズは腕も上り貨銀もよくなり、未來すばらしい夢を見る日夜を送るやうになつた。

ある日、夫のクウポオは、仕事しごと中誤つて高い屋根から墜ちて大怪我をした。六ヶ月経つても仕事に出られなかつた。然し彼女の熱心な看護で、やうやく松葉杖にすがつて表に出られるやうになつたが、妻の抱いた夢想は頓挫するより他はなかつた。然し、グージェの好意で五百フランの金を貸して貰もらひ一かどの洗濯屋を出すことになつた。

今やジェルゼーズは、洗濯屋の女主人として立ち働くことになつた。主人のクウポオも、

全快して仕事に出掛けるやうにはなつたが、この頃ころもすると、彼は友達と居酒屋へまぎれ込むやうになつた。ジェルゼーズは、少しぐらゐ面白い目も見ることがよいと考へて、格別夫を止めようともしないのであつた。

然しクウポオの居酒屋いざみや通ひは日に増し繁くなつて行つた。髪は亂れ、吐く息には毒氣が含まれ、口は腫れ、妻にあたり散らすやうになつた。毒された血液から來る皮膚の蒼さに彼女は居酒屋の「アルコール」の作用を認めてぞつとするのであつた。ジェルゼーズの夜晝なしの働きも、悉く夫の酒代となつてしまつた。グージェから借りた金も、拂へる見込はつかなくなつてしまつた。

働いた金を酒にばかり飲のまれてしまふのは馬鹿らしい、居酒屋にばかり渡さずに、少しは肉屋の方へも渡す必要があると彼女は考へた。そこで彼女の美食が始まつた。かうなる

と彼女は借金のことは頭になかつた。

意外なことがジェルゼーズにふりかゝつて来る。それは、ある夜、夫のクウボウが、昔の彼女の夫なるランチを連れて來たのである。而も、元の夫ランチは、今や身なりも言葉使ひも立派で、堂々たる紳士になつてゐた。彼女は意外にも、安らかな心で、再び彼と握手することが出來た。ランチを信用してゐる夫クウボウは、彼に一番上等な部屋を貸した。三人は友達のやうに暮した。しかしクウボウは相變らず居酒屋に通ひつめた。妻のジェルゼーズも、墮落の階段に足を踏み掛けた以上、もう轉落する石も同然で、一夜情欲に打負されると、ランチの部屋の間に消えた。折悪しくも、娘のナナは、寢床から起き上つて、母親が隣の男の部屋へ消える姿を見てしまつた。

ジェルゼーズは、もう昔のやうに仕事に精が出なくなつた。店の客も減り、洗濯女も出て

行つてしまつた。破滅は眼前にある。而もクウボウは依然居酒屋に浸つてゐる。ランチも、普通の無頼漢になつてしまつた。この二人の放蕩無頼の徒が、蠟燭の兩端から火をつけたやうにジェルゼーズをさいなんで行くのであつた。

居酒屋のアルコホールが、そろ／＼決定的な徴を示し始めた。クウボウは、兩脚が力を失ひ、兩手には痙攣を覺えるやうになつた。

この世の地獄は始まり、生活は沼の泥に沈んだ。ジェルゼーズは、夫を居酒屋に迎へに行つて、夫の仲間の無理強ひから、酒の味を覺えた彼女は、肉體的に影響する快感をも知るやうになつた。

一方ナナは、野育ちのまゝ育つて行つた。彼女は七八歳の時から、既に小學校教師のもてあましものであつたが、十五の年に、すでに嬌態を作つて男を漁るうかれ女となつてし

ラ ソ
まつた。戀と美服と美食との欲望に喘ぎ出したナナにとつては、バリの大通のきらびやかな光景は、息苦しいまでの憧れの的であつた。つひに彼女は、怪げな舞踏場に入つてよく踊り狂つた。母の言葉に首を傾げるどころか、彼女にしては母を罵りかへす證據すら掴んでゐるのであつた。

クウポオの容貌は日に増し凄く變つて行つた。彼の體軀は、醫化學標本室の胎兒のやうに縮み上つてしまつた。ジェルゼースも同様であつた。彼女は今では、酒をあてにしてクウポオを居酒屋へ迎へに行くのであつた。

饑餓と寒さが、容赦なく彼女に襲ひかゝつた。彼女は今では、蒲團を解いて、中の羊毛を一握りづゝ賣つて金に變へるといふところまで來てしまつた。彼女は、忍び難い饑餓に耐へかねて、夫と取組合ひをさへした。一夜、吹雪の凄しいなかを、彼女は暗い街路を

逍遙うて、通行人の袖を引いた。破滅は遂に來た。或日、警察からの書狀は彼女にクウポオが酔つて河に落ち、瀕死のまま、病院に收容されてゐることを傳へた。クウポオは氣が狂つた。そして狂亂を盡して死んだ。

警官は、ジェルゼースも酒のために、またかうした運命になるぞと言つた。その通りであつた。彼女も遂に頭が狂つてしまつた。人々は、彼女がクウポオを眞似るだらうと、意地の悪い興味を持つてゐた。ところが、數ヶ月狂亂をつゞけた後、彼女の死も同様にやつて來たのであつた。

「居酒屋」の内容批判

以上の梗概を見ても、ゾラが遺傳といふことをいかに重大視したか、また、人間の獸性

をいかに詳説闡明したかゞ推測されるであらう。

この作の基調は、ルーゴン・マッカール一族の遺傳性たる飲酒癖が、いかに主人公の生活を支配し破壊するかといふこと、及び作者自身がこの作の序に述べてゐるやうに、巴里の郊外町のベスト菌のやうな世界のうちに在る労働者一家の致命的な滅落、即ち荒飲の果は家族間の楔の弛緩、男女間の醜行、正しい感情の忘却となり、その最後は汚辱と死があるのみといふところにあるので、讀む人は放縱なる生活や、荒飲荒淫が本來善良なる人の生活をどんなところに導くものであるか、無智と反省の缺如とがどんなに人を悲惨な境遇に陥れるかを思はせられぬわけには行かないだらうと思ふ。

ゾラがこの作を書いた目的は、この作によつて、人をこの心境に導かうとしたにある。その精緻な描寫も、この一大シンフォニーを傳へむための微妙なる一つ一つの樂の音であ

る。

彼は表面には道德を説いてはゐない、しかしこの眞實にして寸毫も偽りもない、精細な生活の記録は、自然の良心に深く強く訴へる力を有つてゐる。眞實の價值こそ實に貴いものであると言はねばなるまい。

最後に、彼の描寫には眞實驚嘆せざるを得ないことを附言しておきたい。讀者の方で根氣負がする位、觀察は緻密であり、描寫は精緻である。中に動いてゐる人物の必理から外に表れた動作、その社會に於ける日常の出來事は勿論、一つの家の構造、一つの機械の説、明、一つの料理の拵へ方、一つの品物の出來上りだつて、その道の専門家すらびっくりするだらうと思はれるくうゐ、事實に基いて而も誤らざる觀察によつて描き出されてゐる。寫實もこゝまで行けば神品である。

人物を見ても、主人公たるジェルゼーズ、クウボオ、前の夫ランチェなどは、終始一貫して人物全體が躍如としてゐる。場景にしても、洗濯屋の光景、居酒屋の雰圍氣等、寫實の精と妙と美とを盡してゐる。

藝術家としてのゾラ

ゾラに對しては、文壇では毀譽褒貶まち／＼であつた。センツペリーは最も酷く彼を惡評した人であるが、彼のゾラを非難した重なる點が四つある。

- 一。ゾラは藝術の目的が喜びであるといふ眞理を等閑視してゐる。
- 二。技巧の未だ趨つて、細部の描寫に力を注ぎ過ぎてゐる。
- 三。藝術を科學的、又は似而科學的假定説に屈從せしめてゐる。

四。自然主義的であるといふ作品が自然的でない。自然の低劣な、動物的な醜穢な方面に注意を集中することは、科學の立場よりするも、論理の立場よりすると、全然誤りである。

この非難にも一面の理がある。然し、これは缺點のみ誇張して見て居るといふ憾みがある。ゾラは、その氣質においては自然主義者といふより浪漫主義者であつた。然し彼は、浪漫主義を斥けて、明確に、細密に觀察したものゝみを描かうと腐心したのたある。

またゾラには、唯物主義一點張でないと思はれる點がある。それは、彼が一種の神秘の力を認めてゐる點で、そこから彼の宿命觀しゅくめいくわんが出て來るし、陰鬱な詩が流れて來る。彼の作品を讀んでみると、我々は運命の壓迫を感じる。その運命は純粹に動物的な運命である。彼の作品は、徹頭徹尾、人間の生活を暴威を以て抑壓して顧みない盲目的動物性の力に神

ラ ソ
來の感興から湧いて出る哀愁を充たしめた大叙事詩といふことが出来る。

ゾラの正義感と社會改造の理想

ラ ソ
ゾラには、一つの正義感があつた。従つて忠實な、精密な現實曝露の描寫の裏に、彼の社會改造の理想を察知することが出来る。事の起因を探り、之を解明して人間記録を作る創作態度の一面には、人をして善良な要素を發展せしめ、悪性の根絶を希求する理想主義的立場を看取することが出来る。

從來の理想主義者が、絶對から出發するに反し、彼の理想主義は觀察と經驗とから出發する。即ち、前者が超越哲學を根柢とするに對して、後者は科學的人生觀、唯物史觀を基底とするのである。

彼に正義感の強かつたことは前述した。正義感が強いだけに、社會的不合理に對する憤懣の念も強かつた。ゾラは、憎惡感を以て神聖なものとして見てゐる。それは力強い心の緊張であり、戰闘的な侮蔑である。憎むことはやがて愛することである。憎惡は人に慰藉を與へ、人をして正義の行動に出でしめ、結局人間を偉大ならしめるものと考へたのである。

ラ ソ
人生の醜惡面しうあくめんをのみ描き、赤裸々に肉欲を解剖活寫したために、彼は時として卑俗なる作家の如く誤解されたが、決してさうした非難を受くべき作者ではなく、徹底した理想の特質を備へた人である。その容赦せざる醜惡の曝露も、假借せざる肉慾煩惱の解剖も、すべてを啓示せよ、然らざれば矯正せられずといふ彼の本來の立場から成されたものと見るべきである。

バイロン

その生立

多くの文學者の生涯は、波瀾に乏しく、興味が無いものであるが、バイロンの場合は他の平靜溫和な文學者のそれと趣を異にしてゐる。嘗てゲエテの門下エッケルマンが、ゲエテに向つて、バイロンの著述には純なる教化の何物もないではないかと尋ねた、するとゲエテは、彼の大膽と壯大とは確かに教化的だ、偉大なる者は教化を促進する、偉大は常に構成的だと答へた。ゲエテこそ、バイロンを知る者と言ふべきである。

バイロンの遠祖は、スカンディナヴィヤの海賊である。而して彼の祖父は海軍の將官であり、その父は船長であつた。而も彼は「狂ジャック」と呼ばれた美貌の遊蕩貴族で、カアマ

ーゼン侯の妻を誘惑して結婚したが、夫人の死後、更に資産家の嗣女カザリン・ガートンと婚して、一千七百八十八年一月、ロンドンのホリス街に、ジョージ・ゴードン・バイロンを生ましめたのである。詩人の母も、性質は決して平靜溫和なものでなく、寧ろ激烈でヒステリカルで、鋭感多情、而も噴火的な天才の子を教育するに、皮肉にも選ばれたやうな女であつた。

バイロンは、跛である點を除いては、實に容姿秀麗であつた。その眼は極めて明朗、その聲はまた甚だ清朗であつた。彼は八歳にして早くも従姉のメリー・ダフ嬢に懸想した。十六歳の時、母からダフ嬢の結婚したことを聞いて彼は哀しみの餘り卒倒した。

次いで彼は一歳年上のマーガレット・バアカアといふ美少女に戀した。その爲には眠らず食はずに苦しんだ。マーガレットは二年の戀愛を享樂して肺病で死んだ。詩人がこの戀人を

悼んだ詩の一節を録しておかう――

わがマーガレットの墓を訪ひ、

愛するおくつきに花散らす時

風は静まり、ほの暗き夕、

樹林を渡る風だになし。

この狭き穴倉に、死骸となりて

横はるかや、あはれ、戀人、

嘗ては生々と輝しかりしを、

あゝ、死の神は餌食とせしか。

さあれ何故すゝり泣く、

彼女のたぐひ無き魂は

泣く天使等に導かれ、

日輪輝くあたり駈け行くを。

バイロンの學窓時代

バイロンは、一千八百一年から五年まで、ハロウ學校の生徒であつた。そのあひだ彼はドラリー博士の監督の下にあつた。彼は博士を心から敬愛して、その忠言に従つた。一千八百年、ドラリー博士が職を辭し、バトラー博士がその後を襲ふことになつた。新校長は

頗る不人気であつたが、或日バイロンを、上流の子弟として午餐に招待すると、彼はあつさりこれを拒んでしまつた。

その當時彼はチャワース嬢といふ二歳年上の女に戀したが、少女は年下の少年詩人の戀を受入れずに、他の男と結婚してしまつた。次いで彼は異母姉アウガスタを愛した。然しその愛情は純潔方正なもので、時と所を隔てゝも終に變らざるものであつた。この戀から彼はやさしい詩を幾つか生み出した。彼女は四歳の年長で、詩人を「赤ん坊のバイロンさん」と呼んでゐた。

一千八百五年十月、彼はハロウを去つてケンブリッジのトリニティ學校に入學し、三年の後學位を得た。その頃彼は、學校の唱歌團の音頭取をしてゐる。美しい十七歳の少年エドルストーンに深い愛着を持つてゐた。この少年が彼に心臟形の瑪瑙を與へたことは、彼の詩

に成つて傳つてゐる。一千八百十一年、この友人が死んだ時のバイロンの悲哀は深く劇しいものであつた。

バイロンは、或時友人のホジスンに手紙を書いて「私は何物をも否認しない、併し乍らあらゆるものを疑ふ」と言つた。これによつて見ると、彼は不可知論者ともいふべき懷疑家であつたらしい。彼は詩人バーンズと甚だ多くの類似點を有つてゐた。亂暴不規則な情熱諧謔と沈重暢氣との混淆、矛盾扞格の天性等がそれである、但しバーンズには卑野な通俗があり、バイロンには華美な誇大があつた。

一千八百七年、彼は「閑散時」なる詩集を出版して、知己朋友に配付した。「エディンバラ評論」は、この詩に對して痛烈なる罵評を下した。その大體は、若い貴族が詩を作つたことを冷嘲し、到底詩人たるには適しないから、速かに詩を放擲せよといふのであつた。こ

れを見たバイロンは激怒して、「英國詩人と蘇格蘭批評家」なる一書を公にして、猛烈な反抗と復讐とを試みた。この書の第一版は發行後一ヶ月にして賣切れる盛況を示した。

第一回の外遊と「チャイルド・ハロルドの巡遊」

彼は一千八百九年の七月二日、友人のホッグハウスと共に、二年間の外遊の途に上つた。途上彼は「チャイルド・ハロルド巡遊」の第一篇を草した。アテネでは、彼は英國副領事の未亡人の家に宿つた。その三人の娘は皆美貌で、長女はテリサと呼ばれたが、「アゼンスの處女」なる詩は、この娘を歌つたものである。然し彼の感じた戀は至極無邪氣なもので、全くプラトニツクであつた。

翌年三月の始め、彼はイギリスの小軍艦に乗つてスミイナに赴いた。そこで彼は「チャイ

ルド、ハロルド巡遊」の第二篇を脱稿した。第三篇はジエネヴ近くで起草せられ、第四篇はゴネチャで作られた。

第一篇で、詩人はポルトガル、スペイン巡遊の印象を書き、第二篇ではギリシヤを、第三篇はナルタルの戦を描き、ジエネヴ湖の美を讃へ、第四篇でイタリアの諸市、ロマ、ゴネチャ、フィレンツェを歌ひ、こゝで巡遊者は讀者に決別の辭を述べてゐる。

バイロンがロンドンに歸り着いた時、友人のダラスが彼の詩の出版を世話したいと言ひ出し、「チャイルド、ハロルドの巡遊」を一讀して驚き、この詩集の成功を看破して、マリ―書店の主人にその出版を托したのであつた。

バイロンの結婚生活

美男子の彼は多くの婦人の注目點となつた。カロライン・ラム夫人が「客間に於て婦人連が追従を以て彼を息詰らせる」と書いたのに徴しても、彼がいかに婦人から愛せられたかを想像し得られよう。

バイロンがミルハング嬢と結婚したのは、愛情からでなくて慾からだといふ非難は彼を知らざる者の憶測である。彼は、十九歳の美しいミルハング嬢を見初め、結婚を申し込んだが、一旦は拒絶された。そこで友人の言葉に従ひ、他の一婦人に求婚したが、これも成就しなかつたので、再びミルハング嬢に苦悶を訴へた。かくて嬢も快諾を與へ、一千八百十四年九月に婚約成り、翌年一月二日結婚の式を挙げた。

新婚當初は、兩人のあひだは他目にも羨しいばかりであつたが、バイロンの性質たるや冷然常ならず、而も眼を世界に放ち神を問答しようとして高調する奔放な天性を現し、一家の

些事にあまりに拘泥しなかつたし、その言行も不羈にして自制を缺いだ居たので、夫婦間の感情は次第に融和を失つた。元來、夫人は嚴格に過ぎ、單純に過ぎてユーマアを缺いてゐた。彼の財政は次第に窮乏を告げ、亂暴な飲酒と斷食とは健康を弱め、肝臓にも病を得、更に、習慣的に阿片を飲んだので、若い妻に對して不注意と不親切の度を強めた。二人の間には一女が生れたが、翌年春、夫人は憤懣を抱いて、嬰兒を伴つてロンドンを立去つた。かくて二人は別れたが、バイロンにも愛情は有り、夫人にも情味が失せてはゐなかつた。其後バイロンは、ジエン・クレアモントといふ女優と關係した。夫人の父はそこで離婚調書に署名を求めた。始め詩人はそれを拒んだが、法廷に訴へ出られることを恐れて承諾してしまつた。

彼は著名であつただけに、その悪評も響き渡り、上院に出席することまで罵詈雑言を浴せら

れた。移り気な上流社會は、崇拜した偶像を破壊することにも素速かつた。彼はかく社會から排斥され財政は窮乏を極め執達吏の來襲も頻々たるものであつたが、なほ彼は著書による収入を斥け、進んで「コリンス攻城」「バリシナ」を脱稿した。その勇敢剛放は眞に驚に値するものであつた。

第二回の旅行と彼の傑作

バイロンは、イギリスにあつて不愉快な生活を送るよりも、大陸に渡つて本國の偽善社會を罵り呉れようと、一千八百十六年四月、ドーヴァからオステンドに航した。彼はブルツセルからヲータルトに到り、ラインを経てジネヴに出で、詩人シェリに會した。また昔の戀人クレアモントにも邂逅して情事を樂んだ。

シェリが去つて後、彼はアルプスに向けて出發した。山中天候悪しく、閉居を餘儀なくされた彼は、二日間にして「シヨンの獄囚」を書き上げた。繪畫的記述に、哀愁を情愛とを織り混ぜた叙事詩である。七月「シェリドンの悼歌」「プロミシウス」「マンフレッド」二部、「アウガスタに與ふる書」の一齣等を作つた。

その中「マンフレッド」は、彼の傑作の一つである。主人公マンフレッドの厭世觀は頗る深刻で、その原因は、アスタルテに對する戀愛關係にあるらしい、ゲエテは「マンフレッド」を以て己が「ファウスト」に對比して賞讃した。「マンフレッド」の梗概は次節を割愛して紹介しようと思ふ。

バイロンは更にロマに遊び、詩人タッソの獄舎を見て感激し、「タッソの悲歌」を作つた。彼は暫く人妻なるマリアンナと戀愛關係を結んでゐたが、女の性質が粗暴なのでそ

の夫の許へ歸してしまつた。次いでマルゲリタ・コグニといふ女と關係したが、この女もまた非常に亂暴で、バイロンを見る女があると、皿や小刀を投げたりしたので、彼は彼女を威嚇したが、或る闇夜に、彼女は運河に投身してしまつた。ノーエル夫人の死に因る遺産が來ると、彼はギリシャの一つの島を買ひ、總督領の一種を建設したいと望んだが、その金は大抵イタリヤ自由運動やギリシャ解放に投ぜられてしまつた。

「マンフレッド」の梗概

「マンフレッド」は三幕十場の劇詩である。題の次に「ホレトシヨよ、天地の間にはお前の學問で夢見る事の出来る以上のものがある」といふシェークスピア作「ハムレット」中の句が引いてある。

この劇の主人公は、マンフレッドといつて、中世紀風の宏莊な城の中に育ち、長じてその城主となり、數多の家來を有つて何不自由なく暮してゐた。然るに、彼は先天的に懷疑家の精神と懷疑家によくある反抗の氣質とを持つてゐた。彼には凡てのことが信じられない。善も彼に取つては善でなく、惡も彼にあつては惡でない。世に存在してゐるすべての人間と事物、人間が抱く思想、事物の有つ意味が、一つとして信じられない。従つてそれらに對して憎惡と輕蔑とを抱く。遂には苦々しい自己嫌惡に陥る。涯しのない懷疑地獄に嵌る。そしてその苦しみが次第に耐えられなくなる。そこで彼は勉強を始めた。凡ての事を知れば疑ひも無くなるだらうと思つて學問といふ學問を研究した。一切の人を避けて城の塔に閉籠り、夜となく晝となく種々の學術や魔法を調べた。その結果彼は、人生のあらゆる知識と、他界にまで互る魔術とを會得した。彼は自分の意志通りに、何處にでも行け

るし、どのやうな精霊でも呼び出すことが出来るやうになり、不死の身と成つた。而も、彼は望んでゐた安心を得ることが出来ない。解決は與へられない。否、前にも増して苦惱が劇しくなる。

第一幕第一場。深夜の景、マンフレッド一人、ゴシック風の回廊にゐる。不眠に苦しむ彼の獨白が始まる。彼はこれまで自分の行つた一切の空虚無意味をかこつ。

「最も多くの事を知つてゐる者は、最も深く苦しまねばならぬ。智慧の樹は生命の樹ではないといふ不幸な眞理に就て、最も深く苦しまねばならぬ。」

彼は呪文を以て、光、山、海、地、風、闇、星の七つの精霊を呼び出す。そして自分を助けてくれといふ。精霊たちは「お前は何が欲しいのだ」と尋ねる。マンフレッドは「忘却が欲しいのだ」といふ。然し精霊たちにも忘却を與へる力は無かつた。そこで彼等は「死

ねば一切を忘れることが出来よう」と言ふ。が、マンフレッドは既に不死の身に成つてゐる。彼は再び絶望に陥る。

第二場。アルプス山中の朝。マンフレッドは一人断崖に立つて苦しんでゐる。と、牧羊者の笛が聞えて来る。マンフレッドは断崖から身を投げて死なうとする。そこへ一人の獵師が現れて、マンフレッドを自分の小屋へ連れて行く。

第二幕第一場。獵師の小屋。マンフレッドと獵師との對話がつづく。マンフレッドは死ぬにも死ねない悩みを語る。そして平和な、満ち足りた、自由な獵師の生活を羨む。

第二場。アルプス山間の瀧のほとり。マンフレッドはアルプスの妖女を呼び出して話し掛ける。彼は妖女に向つて己が苦惱を語る。自分は人間と語り、人間の思想と語つたが、而も人間とは何等の交感も有ち得なかつたと述べる。彼は更に、自分を戀して死んで行つ

たアスタルテといふ女のことを語り、その女を甦せて自分に會はせてくれと頼む。然し妖女は傲然として、己が意のままに従はせようとするので、マンフレッドは妖女を追ひ拂ふ。

第三場。ユンクフラウ山上。マンフレッドは登場しない。三人の運命の神と女神ネメシスが、此處に出會つて、アリマネスの宮殿に行はれる大祭へ出發する。

第四場。アリマネス殿の大廣間。アリマネスは玉座に在り、周圍には諸精靈が集つてゐる。第三場の神々が入つて来る。そして大祭が將に行はれようとしてゐるところへ、突然マンフレッドが現れる。彼はアリマネスに、死んだ戀人を甦せて會はせてくれと乞ふ。ネメシスの呪文によつてアスタルテの幻影が現れる。マンフレッドは彼女に向つて、自分がこの世で愛した唯一の人であるアスタルテの聲を聞かしてくれと言ふ。自分が彼女（血縁の女）に對して犯した罪を許すと一言いつてくれと頼む。然しアスタルテは「明日になれば

あなたのこの世の苦しみも終ります」とだけ言つて消えてしまつた。

第三幕第一場。マンフレッドが居城の廣間。マンフレッドの心には、一種不思議な靜けさ。死の前の靜けさが在る。そこへ、セント・モーリスといふ寺院の僧院長が訪ねて来て、「あなたは近來、悪魔と交つて居られるさうだが、もし本當なら大變です。然し神様と教會とは、懺悔さへすればいかなる罪人でも恕します」と説いた。が、マンフレッドはこれを拒み「懺悔はもう遅過ぎます」と言つた。

第二場、城内の他の部屋。マンフレッドの獨白のみ。彼は自分の死が次第に近づくのを意識しつゝ、たゞ一人のこの世の最後の夕陽を見送つてゐる。

第三場。城の塔外の臺地。家來達がマンフレッドの噂をしてゐる。そこへ以前の僧院長が出て来て主人は何處にゐるかと訊ねる。家來たちは、塔の中に居られるが、近寄らぬがよ

からうと止める。然し僧院長は、マンフレッドに懺悔をさせるつもりで塔の方へ行く。

第四場、塔の内部。マンフレッドは、ロマの遺跡を思ひ出して獨語してゐる。彼の眼にはその時見た廢墟はいきよのすがたがまさしくと浮んで来る。

そこへ僧院長が入つて来て、再び懺悔をすゝめる。「いや、もう死期が近付いてゐるので」と言つてマンフレッドは僧院長の忠言を斥けてしまふ。

間もなく死の精靈が現れて、死の宣告をする。然しマンフレッドは、その精靈に自分の魂を渡すのは不服である。

「わしは自分の死ぬ時が来たことを、今までも知つてゐたし、今も知つてゐる。だが、お前のやうな卑しい精靈に、わしの魂を渡すことはならぬ。去れ！わしは、生きてゐた時と同様に、たゞ一人で死ぬのだ。」

が、精靈は去らうとしない。そして仲間の悪魔共を呼び寄せる。それでもマンフレッドは彼等に魂を渡さない。精靈と悪魔共は手出しもならず消えてしまふ。そのあとで、マンフレッドは、従容として死んで行つた。彼は最後に、僧院長に向つて「死ぬことはたいしてむづかしいことはありません」と言ふ。

最後の情事と彼の戀愛觀

バイロンをして、ギリシヤに死ぬまで、その愛情を傾けしめた美人がある。それはギチョリ伯爵夫人である。夫人はロマーニヤの貧しいガムバ伯の令嬢で、十六歳の時、六十歳の富めるギチョリ伯はくに嫁せしめられた。バイロンと戀仲になつたのは結婚した翌年、十七歳の折からである。うら若い夫人は、バイロンを見て忽ち情慾に燃える自身を見出した、そ

れまでは、戀は楽しい戯れ位に思つてゐたのに、彼女はその奴隸となつてしまつた。バイロンと夫人とは一日として會はないことがなく、夫人の愛は、幾多の婦人に接したバイロンも未だ味ひ知らないほど純眞濃厚なものであつた。

ギチョリ伯がラエナに赴く時、夫にバイロンの同行を懇請した。然し意の如くならなかつたので、夫人はラエナで病氣になつてしまつた。バイロンも、夫人戀しさのあまり、漂遊の詩客の如く装うてラエナに赴いた。老伯爵は旅宿に詩人を訪うて、重病の夫人を見舞つてくれと頼んだ。戀人だけになると、夫人は病氣を忘れて戀に陶醉するのであつた。

その後伯爵夫妻はボロニヤに移つたが、バイロンは同行を乞はれて其處へも附いて行つた。それからエネチャへも一緒であつた。一時は詩人と夫人とが同棲をしたが、世の誹謗から夫人に禍の及ぶことを怖れて、詩人は伯爵の許に夫人を歸らしめた。

伯爵は遂に離婚を決心したが、兩人の密通を見て見ぬふりをしたものと見られてゐたので、彼は却つて不利な立場に陥つた。然し翌年七月、夫人からの請求で、ロマ法王から離婚の宣告を受けた。

バイロンは友人シエリの助けを藉りて、夫人とビーザに同棲した。そこは幽霊が出るといふ噂のあるランフランシン宮殿であつた。「サーダナベールラス」「カイン」「エルナア」「ド・ホアン」の諸作は、この時代に創られたものである。

バイロンは轉々として戀人を變へた。この事實を見れば、彼は一個の蕩兒に過ぎないやうにも思はれる。然し彼は單に戀愛を遊戯的に考へてゐたのではなかつた。多情多感の彼は屢々罪惡的な情事にすら墮ちたのであるが、その各の戀人に對する情感は、純眞で熱烈で、決して弄戲的なものではなかつた。別れた妻に對する思慕も、絶えて失つたことは無

く、本國に残した娘のエイダに對する情愛も最後まで切實であつた。

バイロンが暗黑的、絶望的、破壊的の詩人でありながら、女に對する親愛の強かつたことは、左の詩節によつても明かである。

人は、女の身より出づ、

汝がはじめの短かゝる

言葉もまこと、女子の

唇より教へらるゝなり。

汝がはじめの泪、また

女によりて拭はるゝ。

愛顧を受けし男たち、

臨終の看護受くるとき、

傍にありて最終の、

太息を聞くと女なり。

詩人の最後

バイロンは、ギリシヤの獨立戰爭に参加し、寢食を忘れて盡力したが、次第に健康を害し、ミソロンギの假寓に死の床を求めなければならなかつた。

彼は叫んだ、「われはギリシヤに時を與へ、資産を與へ、健康を與へ、今また生命をも與へようとしてゐる。この上何をか成さう。あはれギリシヤよ、われは死を厭ふ者ではないが、何故も少し早く、事ここに至るべきを悟らなかつたか。」

婦人達に熱愛されたバイロンが、病床に侍する一人の婦人も無かつたことは淋しい極みである。「われは眠らう、これが彼の最後の言葉であつた。

彼の死を知るや、ギリシャの士民はいづれも深く哀悼した。彼等は國民葬を行ひ、全國の寺院で祈禱式を擧げた。死體検査後、死骸には香科防腐劑が施された。ミソロンギに埋葬したいと望む人々も多かつたが、エストミンスター寺院に葬るべしといふ意見が勝ち、遺骸は故國に運ばれた。然し、詩人の思想と行爲とを憎む副牧師に拒絶せられたので、姉のアウガスタの希望により、祖先の墓墳なるハクナルの小寺に葬られた。

フ ロー ベ エ ル

その 生 立

ギユスターヴ・フローベエルは、一千八百二十一年、フランスのルウアンに醫者の子として生れた。長じてパリに出で、法律を學んだが、途中で廢學して文藝に志し、やがてセーヌ河のクロアツセに移り、そこで生涯の大部分を過した。

一千八百四十七年、ブリタニーに旅行をし、一千八百四十九年から五十一年まで、ギリシャ、エジプト、及び地中海の諸群島に歴遊し、更に一千八百五十八年、古代カルタゴの遺跡を探ねるため、チュニスに旅した。これらの旅行の期間を除けば、彼はまづたくクロアツセの母の家に留まり、獨身で孤獨の生活を送つてしまつたのである。

その作品

フローベエルは、生涯を創作に捧げた割に、作品は決して多くはなかつた。然し、苟くも遺した作品は、何れも価値の高いものゝみであつた。

彼の作品は、彼の名と常に聯結して人の唇に上る「ボヴリイ夫人」、カルタゴの反亂を背景とした歴史小説「サランボオ」及び「感情教育」の三大長編、「聖アントヌの誘惑」、「純心」「聖ジュリアンの傳説」「エロアディアス」等の諸篇に過ぎないのである。

今日では、以上の諸作は悉く文學史上に立派な立場を有つてしまつたが、發表された當時には、大抵不評を招いだ。彼は世評の盲目に不満を抱いて、衆愚を諷刺した寫實小説、「ブーヴールとベキュシエ」を書き出したが、卒中を病んで途中で死に面した。この書物は

モウバサンの手で出版された。

「ボヴリイ夫人」の梗概

田舎の有福な農夫の娘であるエンマは、結婚生活の幸福を夢みながら、トストといふ田舎町の醫者のシャルル・ボヴリイといふ男の後妻として嫁いで行つた。ところが、彼女の空想してゐる結婚生活の幸福はすつかり裏切られてしまふ。

自分の夫といふのは、案に相違して、何の野心もない、無能無藝の男なので、ガツカリする、それに田舎町に於ける主婦としての自分の生活もひどくつまらない。見るもの、聞くもの、何も彼も癩の種であつた。

彼女はやがて空想に遁れた、何か不思議な因縁で、他の男、夫よりも美貌で、才智が優

れてゐて、魅力に富んだ男と邂逅するやうな道はないものかといふ空想である。北向きに天窓のある納屋のやうに冷い、退屈といふ沈黙の蜘蛛の網に心の隅々まで閉ぢ込められた今の果敢ない生甲斐のない生活よりも、もつと明るい華かな活気のある生活はないものかと、當てもない憧れを抱いてゐた。暇つぶしに漁り讀む小説や雑誌が、いよく彼女の心をそよる。而もこの憧れは充たされないので、彼女はいらくするやうになり、怒りッぽくなつた。妻の病氣の原因が、風土の影響ではないかと思つた夫は、つひに一家をあげてヨイギールの町へ移つてしまつた。

ヨイギールに移つてから、エンマは間もなく女の子を擧げた。そして夫の喜んでゐるに引きかへ、彼女はいよく生の倦怠を感じて來た。やがて彼女は、辯護士の書記をしてゐるレオンといふ青年と親しくなつた。彼は文學にも音樂にも通じてゐた、彼女の話相手に

はまたとない男であつた。レオンはたちまちこの美しいボブライ夫人に戀を抱くやうになつた。エンマの方でも彼を愛するやうになつた。然し、彼女は自分が彼を愛してゐるかどうかと考へても見なかつた。彼女には戀といふものは、爆發と電光とを以て突如として現れるものでなければならなかつた。レオンは、遂げられぬ戀と知つて、悲哀を感じてヨイギールを去り、バリへ行つてしまつた。

すると彼女は再び不機嫌になり、怒りッぽくなつた。彼女は折角近付いて來た戀を遠ざけ斥けたことを知つて悔いた。彼女はルウルウといふ商人から、贅澤品をやたらに買ひ求めて鬱を遣つてゐた。と、その頃、シャルルを訪ねて來たロドルフといふ金持の紳士があつた。この男は、三十四の男盛りで、これまで幾多の女と關係して來た好色漢であつた。エンマを一目見て食指動き、彼女を手に入れる機を覗つてゐた。

ロドルフは、健康のために、エンマに乗馬をすゝめた。そして二人は遠乗を試みた。が林の中で、とう／＼彼女はロドルフに身を任せてしまった。かうなると彼女は、戀愛のさまく／＼な歡樂を味ひ、幸福を享けようと思つた。彼女は、この歡喜と福祉とを永遠のものにしようと思つて、ロドルフと新生涯に入らうと決心した。

ところが、いよ／＼といふところへ行くと、ロドルフは應じなかつた。蕩兒ロドルフから考へると、エンマの思想なんかは馬鹿々々しいものであつた。そして面倒と見てとるとロドルフは匆々その町を去つてしまつた。エンマはそれと知ると卒倒し、病床に就いた。

彼女が健康を回復した頃、ルウアンの町の劇場へ、テノルの名手が來た。夫のシャルルは、彼女をそこへ誘つた。エンマは、その華かな光景に接し、再び空想を煽られることになる。ヨーロッパのあらゆる國々を、町から町への渡り歩き、喝采を博して行く歌唱ひの生

活に、彼女は劇しい憧れの心を抱いた。それだけならばまだよかつた。が彼女はそこで、折柄ルウアンの町にゐたレオンにばつたり邂逅つてしまつた。次の日から、彼女はこの若者と再び歡樂の深みに入つて行つた。

わが家に歸つても、エンマは絶えずレオンのことを思ひつゞけてゐた。彼女は口實を見付けては、ルウアンへ出て行つてレオンとの快樂に耽つた。折柄シャルルの父親が死に、その遺産の件で、レオンの手を煩はすことになつたのは、エンマにとつては願つてもない仕合せであつた。彼女は男との情事以外に何事も考へなかつた。ルウアンから借りてゐた金のこと、家庭の經濟のこと、顧みようとはしなかつた。しまひには、夫の働いた醫療代をひそかに取り立て、使ひさへした。夫に對する彼女は、たゞ嘘で固めた木偶に過ぎなかつた。

然し、レオンとの爛れた歡樂も長くはつゝかなかつた。レオンの親は、息子の立身出世を希^{ねが}うて、二人の仲を裂かうとした。二人としても、糜爛した戀の遊戯に倦み疲れて來た。彼女は生きることの興味をさへ失ひかけて來た。彼女はこの頽廢を喰ひ止めようとして、當てもないロマンティックな戀の場面を空想して、その興奮の中に強ひて生活の倦怠を忘れようとした。ルウルウからは、種々やかましい形式をとつて負債を催促して來たが、彼女はろくく見向きもしなかつた。

破滅^{はかつ}はやつて來ずにはゐなかつた。家や家財道具は競買に附せられた。エンマは、昔の戀人ロドルフを思ひ出した。棄てられて憤に燃えたことのある爲に、再び身を任せて金の都合を頼まうとした。然し男は冷かに體よく要求を斥けた。彼女は氣も狂はむばかりになつた。然し、かうした現實の苦しみに惱みつゝも、彼女には戀の悩みを、戀の酔ひを忘れ

ることが出来なかつた。

つひに彼女は毒を仰いで死んだ。

彼女の死ぬるまで、妻の姦通を知らずにゐた夫のシャルルは、ふとした機會に妻の不品行を知り、失意と憤懣から、自から門を閉ぢて人に會はずにゐたが、庭のベンチに凭れたまゝ、誰も知らない間に死んでしまつた。取残された一人の女の子ベルトは、叔母に引取られたが、叔母の貧しいために、木綿の紡績工場へ通はされることになつた。

「ボヴリイ夫人」の内容と價值

この作は、一千八百五十六年から六十一年まで、前後六年の歳月を費して書かれた大作である。處女作にかうも長い年月をかけた作者は古今東西無比であらう。

「ボブリー夫人」は、非常に引締つた、綿密な観察と周到な技巧とを以てした客觀的小説である。言ひ換へれば、藝術の科學化を徹底した作品である。女主人公エンマにのみ力を注がず、あらゆる枝葉の人物、あらゆる些末な事件までも、深い鋭い眼光を徹せしめてゐる。

この作は、歐洲十九世紀の時代精神を現したものであるが、我々東洋の讀者にも深い感動を與へずにはゐないのは、作の背景に明滅する佛教思想であらう。また、エンマを名とする一女性の生活記録と見れば、作者フローベエルはイブセンに先んじた婦人問題研究家といふことも出来る。然し、この作は決して、一個の女性の解剖を以て能事終るとしたものではない。女主人公を繞る多くの人物を中心として、その周圍、その背景、作者自身が呼吸した時代の空氣全體を表さうとしたのである。

「フローベエル」の著者エミール・ファージェは、「ボブリー夫人」を評して次のやうに言つてゐる。「ボブリー夫人」には四つの階段がある。第一は、明確な目標なしにいろ／＼な夢を見てゐる時期。第二は、ある男をはつきり念頭において、その男が、自分の夢を實現してくれないかなと思つてゐる時期。第三の時期は、肉感的な愚かしい行ひや、烈しい情慾の中に爛れ浸つてゐる時期。而も快樂の中に詩を交へ、一種のロマンスがその中にあると思つてゐる時期。第四は、單なる物質的な愛慾——即ち賣淫に陥りかけた時期である。尤も彼女は、第四の階段には陥らなかつた。この階段に足を掛けることは、華かな戀を求め、彼女の感情の破滅であることを知つてゐたからである。このロマンティックな魂が、現實にぶつつかつて碎かれた時に、エンマは全く死んでゐるのである。

彼女の自殺は、悔恨や失望に原因するのではない。夢が破壊されたためである。夢の碎

破が生きていることの意味のないことを、彼女に闡明したからである。

藝術家としてのフローベエル

實生活に於ては、孤獨な寂寞な生涯を送つた彼も、藝術家としては熱烈な情感の持主であつた。彼は極端な藝術の熱愛者、一種の藝術至上主義者であつた。多くの藝術家は、美を考ふるに多少なり抽象的性質を附與してこれに對した。然るにフローベエルは全くこれと相異してゐた。それは丁度、野心家が權力に對する如く、守銭奴が金錢に對する如く、戀に熱する人がその戀人に對する如くであつた。

従つて彼の作は、全く思ひ惑つた後の自殺のやうなものであつた。彼はひたすら、全身全靈をこれに投じて、狂人のやうな熱心、殉教者のやうな服従、聖劇に赴く僧のやうな敬虔を捧げてこれに従事した。

フローベエルは、「人生は無なり、藝術はすべてなり」と言つてゐるが、この一語だけでフローベエルがいかに藝術を熱愛した作家であつたかを知ることが出来る。

彼はまた、ロマンティズムの要素を多分に有つてゐた。自然主義の開祖でありながら、浪漫主義を基礎として立つてゐた觀がある。そこに彼の藝術の完璧がある。彼がユウゴオを神の如くに敬してゐた點から考へても、フランスに起つた浪漫主義の運動に熱狂的應援をした點から考へても、彼が浪漫主義者の特質を豊かに有つてゐたことは明白である。

また彼は、勇敢に、誠實を以て、上流の奢侈や不徳に憎惡を表明した。その態度は立派な理想主義者のそれであつた。これを以て見れば彼はまた一個の理想主義でもあつたと言へる。

フローベエルの「一語説」

フローベエルが、モウパッサンを熱愛して、その成功をわが事の如く歡んでゐたことは、文學史上の佳話の隨一であらう。

藝術至上主義は、フローベエルに藝術の完璧を求めた。藝術の完璧を期するためには一語と雖も不適當な語は使へないわけである。このことに關して、愛弟子モウパッサンの言葉をこゝに引用することが最も便利である。

モウパッサンは、師フローベエルの言葉を極めて忠實に用ひたが、その作「ビエール・エ・ジャン」の序に、師の言葉を擧げて、その恩に感謝してゐる。

「何人によつても、見られたり言はれたりしたことの無い諸相を發見するためには、わ

れ／＼は言ひ現さうとするところのすべてのものを充分に長く、充分の注意を以て視ることが必要である。凡てのものに、まだ探究されないものがある。何故ならば、われ／＼の眺める物について、われ／＼は前人が既に考へたところのものゝ記憶によつてしか、眼を働かせることが出来ないやうに、習慣づけられてゐるからである。」

また「君が戸口に立つてゐる一人の雜貨商とか、煙草をふかしてゐる一人の門番とか、一頭立の馬車とかの傍を通る時には、その雜貨商やその門番やが、どんな態度であつたかどんな様子をしてゐたかといふことゝ共に、どんな心持の人間であるかといふことを巧みに描き出して、私が一讀して、その雜貨商やこの門番を、他の雜貨商や門番と間違ひ得ないやうにしなければならぬ。また、ほんの數語で、そこにゐる馬車馬が、その前後にゐる五十餘頭の馬車馬と、どういふ點が異つてゐるかを示さなければならぬ。」

以上は、フローベエルが、モウパッサンを小説家として偉大ならしめようとして、諄々と説いた對藝術態度を、モウパッサンが思ひ出すまゝに小説の序文に書き連ねた一節であるがこゝにフローベエルの一語説が生ずるのである。

フローベエル自身の言葉を假りれば、

「われ／＼が言ひ表さうとするものゝ如何なるものにもあれ、そこにはそれを表すたゞ一つの言葉、それに運動を興へるたゞ一つの動詞、それを性質づけるたゞ一つの形容詞を發見するまで、それを探求せねばならない。そしてさういふ言葉に近い言葉を發見したといふだけで満足してはいけない。またさうすることが困難であるからと言つて、いゝ可減なところでごまかしてしまつてはいけないのである。」

藝術上の「無感覺」

一語の選擇にすらかく嚴格な態度を執つたのであるから、藝術家としての彼が寫實主義者となり、自然主義者となつたのも無理ならぬことである。

彼は従つて、徒らに自己を主張するよりも、自己を没却しようとする努力、自然と忠實に記述し、描破しようとする努力、遂に本來のロマシテイシストの素質を離れて行つた。

フローベエルは、小説は客觀的でなければならぬ、非個人的でなければならぬ、更に進んで「無感覺」でなければならぬと思つた。小説は、個人の打開け話や、個人の氣まぐれであつてはならぬと思つた。それは人間の魂に正確な鏡となるべく、人間の生活に忠實な畫面となるべきだと思つた。彼の「無感覺」は古典主義の理性と似て居たので、彼は古典主義の作家たる一面とも備へてゐたと見ることが出来る。

ドストイエフスキイ

その生立

フィオドル・ドストイエフスキイは、一千八百二十一年、モスコウに生れた。彼は極めて數奇な運命を辿つた人であつた。ある軍隊附の外科醫の子と生れ、機關學校を経て、二年間機關手の職業に就き、一千八百四十五年、廿四歳の時、その處女作「哀れなる人々」を出して、一躍文壇の人氣作者となつた。それから四年を経て、ロシアの政治史上、かの有名なフリーエ黨の運動に連關して、八ヶ月間牢獄に閉ぢ込まれ、廿一人の同類と共に死刑の宣告を受け、將に刑場の露と消えるところであつたが、その刹那に赦免の急使が駆け付けて、特に刑一等を減じて、シベリヤに流された。オムスクといふ一寒村に苦役に従事

してゐたが、四年の後ペテルスブルグ、即ち今日のレニングラードの、ある有力家に救はれて、生涯をその地に軍人たるべしといふ條件付で、僅かに苦役を免れることが出來た。而も彼はふとしたことから役人の機嫌を損うこととなり、いはゆる九條繩の苛刑を受けて遂にそのために癲癩を得、一生そのために苦しむ運命となつた。一千八百五十九年、彼は本國に歸り、一千八百八十一年、ペテルブルグで生を終つた。

「カラマゾフ兄弟」其他

彼の大作は、いづれもシベリヤから歸つた後のもので、「虐られし人々」「死人の家」「罪と罰」「カラマゾフ兄弟」「白痴」「惡魔」等の傑作がある。

「カラマゾフ兄弟」は、トルストイの「戦争と平和」と共に、ロシア文學の二大高峰の一

つとせられてゐる。

最初ドストイェフスキイは、トルストイの偉大なる長篇小説から受けた異常な感銘によつて、自分もその大作に質量共に劣らない作品を創造したいといふ希望を起し、先づ「偉大なる罪人」といふ總稱の下に、同じ思想に統一された脈絡連綿たる五大長篇執筆の計畫を立てたが、その後その計畫を一變して、同一の人物に繋がれたる、而もそれ／＼獨立する二つの小説を書くことにした。その第一部が、「カラマゾフ兄弟」である。

この作品は、一千八百七十九年から、翌年に涉つて、「ロシア報知」に連載された。當時ドストイェフスキイは、齡正に六十歳に達し、人生の苦難と焦燥に充ちた長い漂泊の末、漸く故國ロシアに安住の地を見出して、温良な妻と四人の愛兒とに圍繞されながら、生活上の不安に煩されることなく、構想の警拔、人間愛の博大、宗教信念の高遠等、正に世界

有數の大作を完成したのである。

當時、ロシアに於て、この小説が一般社會に衝撃を與へたことは實に偉大なもので、嘗てゴンチャロフの傑作「オブローモフ」が、「オブローモフシチナ」といふ新語を生んだやうに、このドストイェフスキイの傑作も、「カラマゾフシチナ」なる新流行語を作り出した。

從來、平明、靜穩、緩漫、優柔などいふ田園牧歌的な精神を象徴する「オブローモフシチナ」が、ロシア國民性の全部を抱擁するものと思はれてゐた時に當つて、これと全然反對な、混沌、狂亂、激勵、強烈等の特質を代表する「カラマゾフシチナ」が、等しくロシア國民性の一面であることを示されて、ロシアの社會は一大驚異を抱いたのである。

「罪と罰」の梗概

主人公ラスコールニコフは、ペテルブルグの貧しい大學生であつた。彼はその貧困によつて、また神經沈鬱症しんけいちんうつしやうによつて、甚しく苦しめられてゐるあひだに、ある不思議な病的なことを考へ出した。それは彼の下宿の近所に居る、ある貪婪な、無慈悲な高利貸の老婆を殺してしまつたらといふ空想であつた。彼は自分の周圍にある多くの貧困者の生活を見るにつけ、聞くにつけ、かうした貪婪な老婆を生かしておくことは到底出来ないと思つた。この一人の女を殺すことによつて、幾人の不幸な男女が幸福になるかも知れない。彼自身も亦、彼女を殺せば多くの金銭を得て無事に就學することが出来るであらうと考へた。これがラスコールニコフの殺人の動機であつた。然し彼は更にこれ以外に、この殺人を是認ぜにんするやうな人生觀を造つた。それはかうである。

「人間を、常人と非常人との二種に分類するのは、些か獨斷に過ぎるかも知れないが、文字の詮議はどうでもよい。この説の根柢の核心は、これ頗る堅實なもので、畢竟かういふ意味になる。

自然は人間を二階級かいきよに分つてゐる、一つは常人から組織されてゐる劣等種族で、自分と同じ似たものを生殖する働きを有つ物質の一種である。もう一つの階級は、高等種族で、新しい説、思想、または事業を創始する天稟、又は力量を有つてゐる人から組織されてゐる。更に細別したら、それこそ數へ切れない程の數に分れるであらうが、この二大階級は截然さいぜん區別すべき特質を有つてゐる。そこで、第一の階級には概して保守的、秩序的の人、即ち服従の状態を甘んじて生活し、且つこれを好むものが屬してゐる。私に言はせると、かういふ人たちは服従するより他仕方がないのだ。元來服従がその人たちの運命だから、服従しても少しも恥しいことはない筈である。――

ところが、次の階級となると、法律を破つたり、或はかれらの才幹力量に應じて破らうとひしめいてゐる人たちから選りすぐつて組織されてゐる。かれらの犯罪は自然相對的のもので、種々雑多だが、歸するところ、その最大部分はかれらが成立させようとするものために、現に成立してゐるものゝ破壊を主張してゐる。且つ進んでかれらの思想を行はうとするに當つて、若し血を流し、死骸を踏越えねばならぬものなら、思想の貫徹のためには奮つてこれを敢てすることを少しも辭さない。

要するに、第一の團體は、常に現在に勢力を占めるが、第二の團體は未來の師表である。一は人類を繁殖して世界を維持し、他は人道を振起し、活動せしめることを任務として世界に共存する同一の権利を有つてゐる。」

かくも、唯物論的傾向に、ニイチエの超人説を加味したやうな思想を抱き、自らは第二

の階級に屬するものと自任して、遂に彼は金貸しの老婆を殺してしまふのである。

けれども、いよく殺したあとの彼の氣持はどうであつたか。前述の人生觀から、この殺人を當然のことと思つてした彼の行爲は、殺人後の彼の心に何等の攪亂を齎す筈はなかりさうなものだが、實は全く反對であつた。

彼は人を殺したといふ苦しい意識に深くも惱される。彼は老婆殺しの事實の發覺を怖れれば怖れる程、いよく危険な言葉を口にするやうになり、益々危険な場所に入り出すやうになる。彼は夏の虫が火の周圍をぐるぐると飛び廻るやうに、己が運命の破滅を豫想されるやうな危険な場所に入出入する、そのヘルプレッスな行動に出ずに居られない彼の心理は、近代文學に類比もないほど、深刻精緻に描寫せられてゐる。

この苦悶の最中に、彼はソーニヤといふ純潔な少女と戀に陥る。彼女はその不幸な家族

のために、己が肉をひさぎつゝ、靈魂までも次第に腐敗して行かうとしてゐる時であつたが、彼と戀仲となつて、精神的に救はれることとなる。

それと同時に、ラスコールニコフも、その精神の健康をやゝ恢復して、乙女に向つて己れの罪を語り、懺悔と戀愛との意識から、自己の精神の自由を初めて経験する。この経験に比すれば、牢獄の苦痛などは何でもなくなつて来る。かくして彼は自己の犯罪を自首して出て、遂にシベリヤに流されることとなつた。そこで、戀人のソーニヤも彼の後を追うてシベリヤに行くのである。

「罪と罰」の價值と内容

藝術の純乎な立場から「罪と罰」を見れば、必ずしも缺點のない作品とはいはれない。

この作が、徒らに冗漫であることは、「ロシア文學に現れたる理想と現實」の著書クロボトキンも認めて非難してゐる。

然し、「罪と罰」の眞價は、描寫の冗漫などいふ缺點で掩はれるものではない。主人公ラスコールニコフが、善き人々の苦しみを救はうとして悪人として醜名を着てゐる老婆を殺し、而もその罪惡に苦しむ心理は、あらゆる階級の讀者、あらゆる國籍の大衆に甚大な感動を與へてゐる。

また若いソーニヤといふ娘が、境遇に強ひられて、肉を賣るに至ると、忽ち靈魂の墮落に移つて行く經過、あらゆる女性の缺陷を巧妙に大膽に描寫したその手腕は、すべての讀者を魅了するであらう。

貧民社會、下層階級の眞の狀況や、そこに居住する虐げられた人々の生きくゝとした描

寫は彼の博大な、人道的な、即ちヒウマニテリアニステイクな意想を背景にして、見事な成功を示してゐる。

この事が明治二十四年に魯庵ろあんによつて譯出されると、當時の文壇の大家が一齊に感動を受け、泰西文學の移植に多大の力を添へるに至つたものである。

藝術家としてのドストイエフスキイ

ドストイエフスキイが取扱つた材料を見ると、その多くは、全然暗黒面に蠢動する人物や、恐怖と苦痛に充ちた事件、罪惡と血と呻吟しんげんとの息窒いきづまるやうな渦卷である。その主人公の多くは、狂人であるか癲癩病者、自殺者か犯罪者で、言はゞ社會から蹂躪され、辱められ、虐げられた人々のみである。

然らばどうしてドストイエフスキイはかくも暗黒な事件や悲惨な人物ばかりを取扱つたのであらうか。

それは他でもない、人間は、いかに悲惨な境地に陥つても、その靈魂の本來の清淨は決して消えるものではないといふことを説明せむがためである。いかにも、彼の作品の陰慘讀みに忍びない雰圍氣ふんゐきの中から、讀者は靜かな、柔かな、神々しい宗教的感激の白光の射し出て居るのを認めずにはゐないであらう。

ドストイエフスキイは、社會的、肉體的、乃至道德的に墮落した人間を描きながら、泥土の如き穢はしいものゝ中にも、なほ透明な水晶の清らかさが潜んでゐることを知らしめてゐる。即ち彼は、天刑の病者の多數に救ひを與へる慈善家じぜんかのやうに、社會から迫害され、辱しめられ虐げられた、憐れな人々のために、人間の靈魂の莊嚴にして且つ清淨であ

ることを示し、彼等を慰み勵ましたものと見る事が出来る。

我々は、藝術家としての彼を論じつゝ、彼の體驗した苦難くなん焦慮せうりよ忍從にんじゆの生活に想ひを馳せずにはゐられない。

彼とトルストイとの比較

およそドストイェフスキイ程生涯を苦しみ通した作家はあるまい。貧乏と病氣とのあらゆる窮迫に虐げられた作家はあるまい。トルストイはその反對に貴族の家に生れて何不足無い身であつたが、彼は自ら求めて苦惱くなうに身を投じたのである。

メレヂコフスキイは彼とトルストイとを比較して、「彼は金錢を愛した、が金錢の方で彼を愛さなかつた。トルストイは金を憎んだ、而も金の方で彼を愛して向ふからやつて來

た」と言つてゐる。これは二人の極めて卑近な一面を比較したに過ぎないが、而もこの對比はこの二大作家のすべての方面に顯著に現れてゐるのである。

またメレヂコフスキイは、トルストイとドストイェフスキイとを比較して、イタリヤ文藝復興期の二大藝術家たる、ミケラジエロとレオナルド・ダ・ビンチに擬してゐる。

ミケランジェロは肉の深さを洞察くわんさつした。レオナルド・ダ・ビンチはその反對に靈の深さを洞察した。後者は前者の已に到達したところから出發せんとした。故にダ・ビンチの作品は、すべて靈的の肉で、肉が透明玲瓏になつて、その中に燃えてゐる靈の光が、おのづから透き通つて見えるといふ趣を備へてゐる。彼の諷刺畫、人物畫等に於ける人の頭獸の顔は、いかに惡魔的に描いて見ても、皆、天使のやう魅力みりよくに充ちてゐる。レオナルド・ダ・ビンチの作品は、ドストイェフスキイの言つたやうに、天の神秘と地の秘密とを混和したも